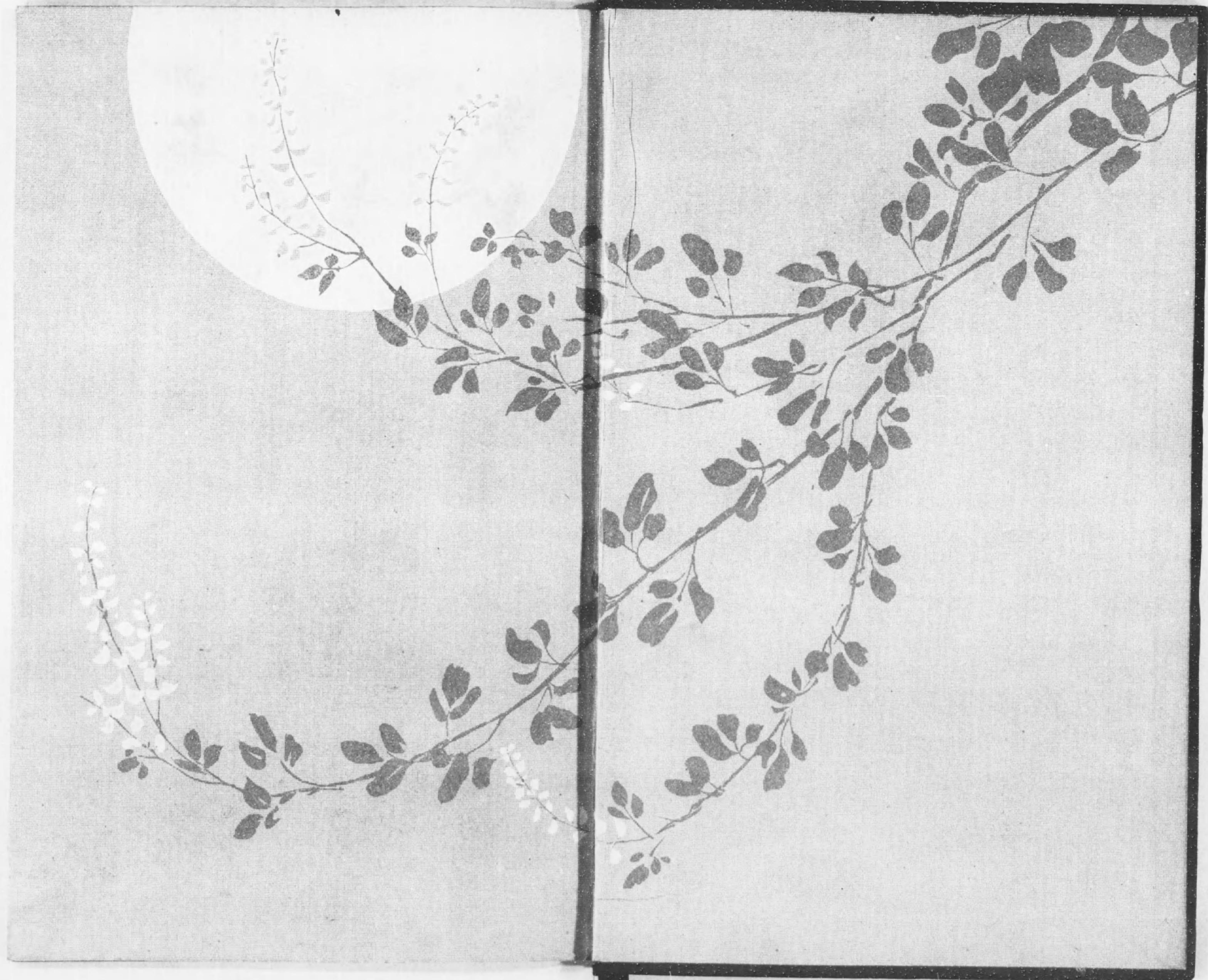




始







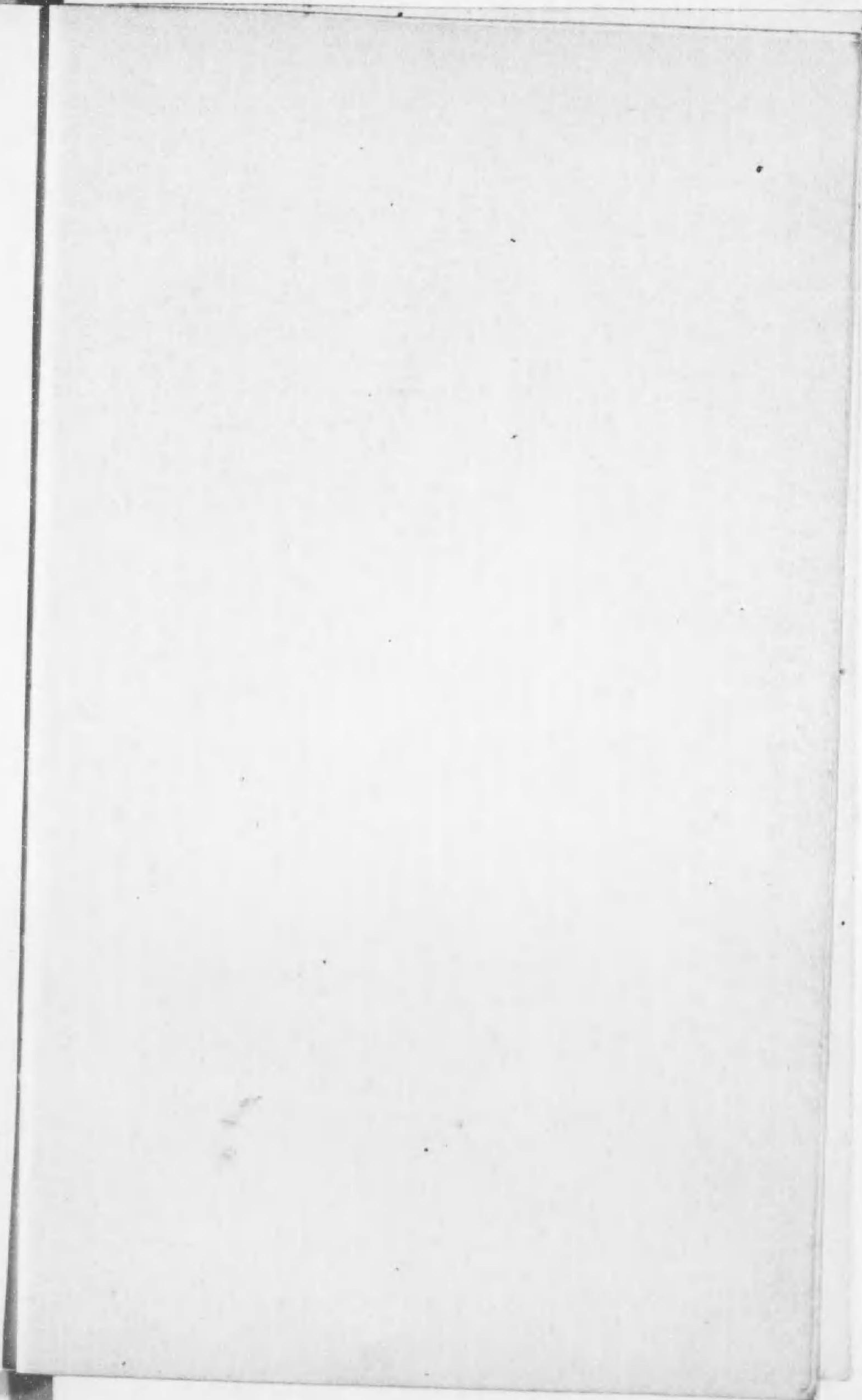
特116
526



やまと新聞所載

小林躰月作





説小
灯

小
林
蹴
月

夏の初めの平和かな日光が、軟らかい若葉の窓を透して、備後の青畳に夢のやうな淡い浮模様を漂はして居た。子爵夫人喜久子は、恍乎とした眼に、その浮模様が風に揺れる度毎、化した傘のやうに大きくなつて膝の上まで擴がるかと思ふと、又倏ち折疊むやうに小さくなるのを、不思議さうに視て居た。

何處からか、小鳥の囀りが聞こえた。喜久子夫人は、眼を上げて窓越しに庭を眺めた。けれど、小鳥の影は見當らなかつた。影は見當らなかつたが、囀りはより近く聞えた。ばたりと音して地の上に着こちたものがある。咲き遅れたる藪椿が一輪崩

れて散つたのであつた。その癖、色は少しも褪せず、拾つても見たいほど真紅で美しかった。

『色は衰へなくとも、散る時には散る。』

後霎時は愁然として脇息に小脇を凭せたなりであつた。

『奥様、お召になりまして御座いますか。』

母宅と區割られたる妻戸を開いて、小走りに出て来た白足袋の高島田は、恐る恐る敷居の前に両手を支へた。

『いえ、呼びは爲ません。』

喜久子夫人は、稍意外らしい眼元に、高島田の顔を眺めた。

『それでもあの七號の呼鈴が鳴りましたやうに……。』

『ほ、ほ、ほ、何處か他のお座敷で御前様がお呼びになつたのでせう。』

『いえ、御前様はあの朝の間にお出ましになりましたして御座いますから……。』

『おや、然うですかえ。』

若葉を透す日光の工合でもあらうが、夫人の顔は透き通るやうに眞蒼であつた。

『御用がおあり遊ばしませんのならば……。』

高島田は、行儀好き挨拶を残して、立ち去らうと爲た。

『あの、一寸小壽美……。』

夫人は軽く呼び止めた。

『はい。御用がおあり遊ばしたら何卒。』

小壽美は中腰ながら斜めに三ツ指。

『いえ、用ではありませんが、恰度好い折ですから、少し和女に訊ねたい事があるの。』

『私にお訊ねの事と申しますと……。』

小壽美は、何か不安らしい面色のないでもなかつた。

「可いから、もう少し此方へ入つてお呉れ。」
 夫人の聲は、毫もその平生の温和さと變つて居ないが、小壽美は、妙にはにかむだやうな恐るゝの態度で、三筋五筋のおくれ毛までが、爪かに戦きを帯びつゝ前へ進むだ。

小壽美は、今年十七の苔の花、齡の割合には柄も大きく、おつとりとした下膨れの優しい顔質で、數多あるお小間使の中でも、際立つて男の眼に付く方であつた。難は少しく齒並びのわるいので、富士額の稍行詰つたやうに狭まつて居ると、肩の肉の圓過ぎるのとであつたが、睫毛の濃い、黒目がちの目元の涼しさと云つたら、他のすべての缺點を補ひ得て、尙剩餘ある位だ。併し、見た所から智慧の女ではない、生れたまゝの女であつた。

(一)

「小壽美、和女屋敷へ来てから、二年近くにおなりだね。」

「はい、一昨年の十月から御奉公に上りましたので御座います。」

喜久子夫人は、熟と物思はしさうに瞳を据ゑつゝ、

「たしか、其頃だつたねえ。元は甚麼見ず知らずの他人であつても、斯うして二年近くも一緒に住み馴れて見ると、其處に自然と口に言へない温味の出て来るもので、私は和女の事を決して、赤の他人とは思はないんです。でね、小壽美、和女又變に考つてお呉れだと困るが、私、心底から和女に訊ねて見たい事がありますの。和女も何うか、その了簡で、嘘飾りのない所を打明けてお呉れよ。」

斯う言ひながら、夫人は、自身の方から褥を這つて、一尺ばかり膝を進めた。と、小壽美は、何が故とも知らず、顔を火のやうにして、島田の頭を垂げて了つた。一體小壽美は、夫人の前に限らず、長上の人から少し複雑つた話を爲れると、譯もななく顔を赤める癖がある事はあるのだが、今日は就中で、それが烈しいのであつた。

「はい、それは又如何やうなお話で御座いますんで御座いませう。」
 「他でもありませんかね。」と、夫人は、故意に眼を外らして、窓際の若葉を軽く視ながら、

「和女、何時頃から御前様のお伽を仰付られるやうにおなりだつたの？」
 夫人の質問方も、稍露骨過ぎたかも知れぬが、小壽美は、その語の途切れるか途切れない中から、夫人の眼にも見えるほどの顫へを發して、火のやうな顔は一層紅を染め上げたのである。

「小壽美、其處に何も恥かしかるには及びません。私は和女達も薄々は知つてお在の通り、ごうせ、御前様のお氣に召さない事だらけで、此の通り有るか無しの待遇を受けて、今ではほんの二人の子供達の嫁姆役も同様のものと斷念めて居るんですから、はしたない嫉妬の炎を燃やすの、それが爲めに、和女を羨み猜むの、乃至は又裏面に廻つて、和女を屋敷から暇取らせるのと、其處淺奥敢な愚痴らし

い私の考へでは、毛頭ありません。唯、和女が眞實の事さへ打明けてお呉れなら、その上で、私から和女に折入つて頼みたい事があるんです。」

「……………」

小壽美は、中々左右の返答を爲るどころでない。穴あらば消えも入りたい思ひで、膝に置いた手さへも、滅多に動かし得ぬのであつた。

「和女、黙つてお在ぢや仕様が有りや爲ないわ。」と、夫人は、多少持ちあぐむだやうな調子で、

「恰憫な和女にも似合ない、私が是程事を分けて言ふのにねえ。」

小壽美は、尙五分間ばかりも、普通よりも大柄の身體を、硬く縮めて、段々に押詰つて来る呼吸を、苦しげに只通はするのみであつたが、落着かね精神を無理に鎮めて、

「……………奥様……………申譯が御座いませぬ。」

便りの糸を切放された様な聲であつた。

「ほ、ほ、ほ、私は和女に詫さうと思つて、言ふのぢやありません。實はね、小壽美、此頃容子を聞いて見ると、年は上でも、和女よりはすつと新參の篠江も矢張、御前様のお寵愛に成て居るとやら云ふ事ですが、其事に就いて、和女はまだ何にもお聞きの話はないかえ。」

讀めた！夫人の間はんと欲する所は、小壽美其者の上よりは、寧ろ、篠江とやら云ふ新參者の方にあつたのである。

(三)

「篠江さんの事と被仰いまして、私は何にも存じませんで御座います。」

「知らない？本統に何にも知らずにお在かえ。」

「眞個、私は何にも存じませんの……。」

「然うかえ。知らないとあれば、それまでの事です。」と、喜久子夫人は、何だか膽に落ちかねたやうな面色。少時口を緊むで、自分の掌を凝視めた後、

「ではね、小壽美、改めて和女に訊いときますが、和女は此のお屋敷に、一生涯御奉公を勤めて居てお呉れの了簡か。それともあの、相應しい所があつたらお嫁に行かうと云ふ了簡でお在か？」

「はい。私はあの……。」

折角稍落着きかゝつた小壽美の精神は、此の新たなる質問に出會つて、更に新たな躊躇と苦痛と恐怖とを喚起したのであつた。

「はいでは解りません。和女が斯うありたいと思ふ所を、遠慮なしに言つてお見なさい。」

夫人の鋒先は、漸く急激の度を加へる。

「はい。それでもあの……私には……。」

小壽美は、今にも泣き出しさうに顫へた。涼しい眼の底には、涙の光りさへ輝めいたのである。

『何方とも言へないとお言ひのだね。』

『……………』

『困つちまふね、和女は、私にはつかし物を言はせて……………。それぢやね、小壽美、もう和女には、何にも訊かぬ事に爲ませう、用が済みましたから、彼方へ行つて下さい。』

夫人は、到頭度しがたき者と断念めて了つたらしい。必ずしも、それが嚇して訊かうと云ふ策略でもないのだ。

『あれ、奥様、然う被仰られましたは……………。』

『いえ、もう訊きますまい。私は決して、嫉妬や猜疑の心から、這慶事を和女に言ひ掛けるのぢやありませんよ。和女の考へ次第では、行永長く和女に御前様のお

側に居て貰ひたいからこそ云ふのです。それなのに、和女は何だか私の心を疑つてお在のやうだから、もう／＼、此の上の事は言ひますまい。私は何も、和女の泣き顔を見やう爲めに、呼び止めたのぢやありませんからね。』

夫人は、讀みたくもない物の本を引寄せて、味なくも顔を彼方に反向けたのである。小壽美は、起たうにも起たれず、坐やうにも坐られぬ仕儀となつて了つた。他へお嫁に行きたいと言へば、明かに御前様のお側に居るのが厭で御座いますと云ふ事に陥るし、御前様のお側に居たう御座いますと言へば、夫人に對して此上長く怨恨の種を醸すやうなものである。だが、併し、小壽美の心を割つて言へば、何ぼ子爵家の御前様でも、末永き一生を日蔭の花で暮さうとは冀つて居ない。加之、彼女には彼女だけの理想もあれば、希望もあるのです、世の中が若し、自分の思ひ通りに行くものなら……………とは、寢ても起きて、彼女のいたいけな心に往復して居た重要問題であつた。けれど、小壽美の性質として、何うして其慶事が口に言へやう。

「奥様、私の至らぬ罪で御座います。情願………情願、御堪忍遊ばして下さい。」
立ち端を失つた彼女は、唯是丈の事を言つて、詫び入るより外、何等の術も知らぬのであつた。

「知りません。用が済むだと言つたら、彼方へお退り。」

夫人は、見向きもやらずに、物の本を見て居る。

小壽美は、遂に泣き倒れた。彼女は、斯程までに初心な引込み思案の女であつた。

(四)

幸野原子爵の本邸は、向島の白鬚社頭から、約五六丁を鐘淵寄りの、晝も水鶏が聞かれさうな、極めて幽寂なる一構へであつた。昔ながらの奥深い純日本式の建物は、星霜二三百年の老槐古松鬱として蔽ひ茂つた樹の間に隠見して、表門から玄關の式臺に達する丈でも、一丁餘りはある。古風で床しいと嘆賞する人もあるだらうが、

實は少々陰鬱の氣が充ち過ぎて居るので、雨のしどくと降る日などは、築山裏の藪蔭から百鬼の行列でも出て来さうな氣色だ。縦し、それ程にないとしても、蛇や蟻の安樂境となつて居る事は確かだ。冬は狐も鳴くであらう。狸や鼯も巢を造つて居るに違ひない。殊に一二年前の大洪水の時、邸内諸所の土塚や石垣が潰え崩れたのを其儘、碌々修繕も爲すにないので、何處か相馬の古御所然たる趣きもなきにあらずだ。

其の癖、當主の秀勝子は、舊華族の出でありながら、外國の土も一二度は踏むで来て居るし、數年前までは外交官の班に伍して、相應難澁しい國際的談判の手傳ひ役に當つたこともある人だが、平生の趣味と云ひ、生活の狀態から總てが、それと正反對の蠻カラ式であつた。自ら暗に子爵團中の老壯士を以て任じて居るのに徴しても、其の半面が窺ひ知られる。

秀勝子は本年四十一歳、俗に云ふ男の前厄に當つて居るが、顔の大部分が漆の如き

黒髻に掩はれて居るので、一見五十格好の人と見られる。白鬚の隣りの黒髻の御前とは、葉櫻拍子の子爵に對する尊稱語で、一名は又鍾馗の御前とも稱して居る。勿論髻の爲めばかりでなく、眼付の鋭いのと、少し猪首の巖丈無比の軀體とは、蕭白が走り書の鍾馗大王酷似であつた。天性又是に適ふで、他に腰を屈するなご云ふことは、絶對に嫌ひな方であつた。詰り、言ひ出したら肯かない、理窟不理窟は人間の勝手に取極めた理窟らしい不理窟であるから、人間以上のものが其處に現はれて坦懐に判断を下して呉れぬ限り、人間と人間との論争は、到底三文の價値もあるものでない。と云ふのが、秀勝子の獨裁的處世觀なのであつた。是では何うして、官邊の人となつて、重箱の隅を楊子ではせくつて居ることが出来やう。兎にも角にも、世間から見た幸野原子爵は、華胄社會に珍らしい猛烈な亂暴な身勝手な怖はらしい偉さうな人物として、婦人などはなか／＼側へ寄り付きも爲なければ、寄せ付けも爲なさうな、人のやうに思はれて居たのであつた。

子爵は、今同族の相談會から歸邸して、竹の間の書齋に入つた。それが恰度日の暮前のことであつた。真先に其處へ出て来て、御機嫌を伺ひ奉つたのは、きやしやな廂髪の細面であつた。

「篠江か、酒ぢや、西洋酒を持て来い。」

是が喜久子夫人の頭を惱して居る篠江である事が分つた。篠江は、何様小壽美に比べるに、三ツ四ツも年嵩であるらしい。何者の變體かは知らぬが、一寸した身の仕打にまで、酷く際立つて濃艶らしい情味が籠つて居た。

「はい、只今直ぐに……。」と、故意とらしからず子爵の顔を視上げて、鼻かに手を支へながら答へた態度は、無理にでも男を自分の魔力で、屈服させて見たいやうな物腰。女としての野心家たる事は、その凛々しげなる眼元、口元にも知られるのであつた。

幸野原子爵が他から歸つて来て、直に西洋酒を命ずるの時は、大抵其出先に於て、何事か意に満たぬ事柄の起つた場合か、左なくとも、氣分に於て多少の變動を來した場合に限られて居るので、子爵家の家族間には……御前様と西洋酒——二百十日の低氣壓……と云ふ符牒さへ出來て居た位であつた。

篠江も素よりその邊の呼吸は承知しきつて居るので、大急ぎに玻璃盆の上へ、西洋酒の幾種類かを取揃へて運むだ。但し、是丈は蠻カラの子爵とは、稍不調和な嗜好であつた。

子爵は、篠江が細りとした眞白い手先で、満々と注いだ香の強い琥珀色の西洋酒を引取るより早く、息をも繼がずにぐいと呷つた。二三滴の單が、何うかした機みで、鐘撞髯を傳つて、仙臺平の膝に滾れた。

「あら、お膝に……。」と、篠江は、艶なる眼を睜つて、袂から桃色の手巾を取出し、手を差延べてそれを押拭つた。

「關はん。も一ツ注げ。」

子爵は、グラスを突き出しながら、愛嬌もなく篠江の顔を凝視めた。

「はい。大層お早く被在ます事。」

篠江は、壺を取り上げて、又満々と酌した。子爵は、同じやうに呷りつゝける。

「も一ツ、お注ぎ致しませうか。」

「無論ぢや。要らんと云ふまで注げ。」

篠江は、心私かに恐れた。お出先で如何なる御不興があつたにもせよ、その餘憤を此方へ持つて來られては、埋らぬ仕事だと思つた。併し、自分の手腕を以てして、是位の轍が取りきれぬやうでは、篠江の女も既う廢れたと思つた。

「御前様、お袴をお脱り致しませう。そしてあの、篠江が膝で少々お寝り遊ばしたら

「如何で御座います。」

「うじ、それも好からう。好からうぢやがまあ、貴様も一ツ飲め。」
斯う言つた子爵の顔は、既う夕焼の空より赤かつた。眼の色も、幾分どんよりと爲て来たのである。

「はい、私にで御座いますか。それでは、御前様のお零なりとも……………」
辭退したとて、お赦しの出る御前様ではないので、篠江は、優しく寧ろ喜ばしさうに觴を頂く。

「うの奴ぢや。ぢやから、貴様でなうてはならんと言ふのぢや。」
子爵の御不興は、案の條酔ひと共に薄らいで来た。

「ほ、ほ、ほ、お褒めに預りまして、嬉しう御座います。」

篠江は、心から嬉しさうに微笑む。

「然うぢやらう。嬉しうなけりやならん筈ぢや。長うても、三月か四月の間には、

貴様も一躍して子爵夫人に成れやうと云ふもんぢやからの。」

「まあ、御前様には御冗戯ばツかり……………」私風情が何う致して……………」

「いや、冗戯ぢやない。私風情も彼方風情も要らぬ詮議ぢや。華族も人間なら、車夫も馬丁も同じ人間ぢや。お前ぢやからとて、子爵家の夫人に成れんと云ふ理窟が何處に在る？」

「では御座いまして、御前様には彼のやうな立派な奥様もお在遊ばします上に、あの……………小毒美……………」と、篠江は、半分まで言ひかけた語を、口の底に嚙み殺して、

「御前様、私のやうな白痴者は、御冗戯を仰せ遊ばしても、つい本統に致しますから、御赦し遊ばして下さい。」

「貴様は本統にせんでも關はん。乃公がぢやんと、然う取極めとるんぢや。何様、奥は居るに違ひないが、彼りや疾の昔から、床の間の置物ぢや。埃にならうと、

手足が剝げやうと、成行次第ぢや。何ぢや、小壽美が何うとやら言ひかけたやうぢやの。は、は、は、彼様京人形の出来損じが和女、何うならうと思ふとるんぢや。」

強烈な酒の効能も勿論與つて力あるのであらうが、篠江が圓轉滑脱なる手練の取廻しは、忽ちにして、子爵を鉛の人と化せしめたのであつた。

(六)

「あら、御前様、小壽美さんを京人形の出来損じだなど、お屋敷中は申すまでもなく、廣い世間にも、小壽美さんほどの美人は、容易に見られることでは御座いませぬ。」

「莫迦な事を。標致ばかりが美しくても、氣に働きのない奴は、木偶ぢや。まさかの時に、物の役に立ちやせんからの。は、は、は、は、は、は、は。」

腹と口とは、多少の違ひがあるにせよ、子爵は、夫人よりも、小壽美よりも、眼前に居る篠江の、てきはきとした伶俐な取廻しが、一番御意に召して居らるゝのは、事實であつた。

「まあ、お口のわるい……耳が痛う御座いますわ。」と、篠江は、故意と卑下したやうな言ひ態をして、半杯の西洋酒を眼を瞑りながら、無理に飲み乾し、

「御前様は、ともすると、彼の小壽美さんの事を、柔順し過ぎるとか、氣が利かぬとか、仰せ遊ばしますけれども、彼れでなかく、外見によらない大膽な處が御座いますやうです。」

「何ぢや、外見によらぬ大膽な所がある……?、そりや又何う云ふ所ぢや。」

子爵の眼の色は、不審の光を放つた。
「私、他さまの秘密を許く譯では御座いませぬけれども……。」と、篠江は、徐々に或る物を揉み解くやうな調子で、

「彼れでなかくな事が御座いますの。御前様は、何にも御承知遊ばさないかも知れませんが……。」

「知らん。乃公は何にも知らん。貴様の知つとる事があるなら、言うて見い。」

子爵は、殆んど無意識に、注いであつた酒を呷つた。

「では申上げませう。申上げます事は申上げますけれども、篠江が斯々申したなどと、御本人にでも仰せられますやうな事があつたら、それこそ大變で御座いますから……。」

「其座事はない。言うて見い。」

篠江は、尙躊躇ひがちに口を歪めて、

「御前様、本統に此處だけのお話で御座いますけれど、小壽美さんには、疾の昔から、附者が御座いますの。」

「小壽美に附者があるツ？、そりや元來何奴ぢや。」

子爵は、又しても袴の膝を押進めながら、ぐいと呷つた。そして、他所目にも痛からうと思はるゝほど、手先で強く願髻をこき下した。

「ついで、お眼の前にお在遊ばす忠七郎様で御座います。」

篠江は、斯う言つて、流石に人もやあると氣遣ふらしき眼元に、我後の方を顧る、

「怪しからむ、對手が忠七郎ぢやと？」

子爵の髻は、薄の如く戦いだ。

「お二人の仲は、本統にお羨ましいほどで御座います。」

「篠江、そりや眞實の話ぢやの。」

「何しに、私が御前様をお欺し申すやうな事を……。」

「好しッ。忠七郎を此處へ呼べ。」

「あれ、御前様、お聲が高う御座います。それゆゑにこそ、私が彼れ丈……。」

「忠七郎が居らん筈はあるまい。急いで呼べ。」

忠七郎、忠七郎と云ふ子爵の噂りが、つゞけざまに室外へ漏れ聞えた折しも、偶然お廊下を通りかゝつた一個の壯い男があつた。琉球の書生羽織に、セル地の袋袴を穿つた二十二……三三の。

(七)

「呼べと言ふたら呼ばんか。早く……早く忠七郎を是へ呼べ。」
子爵の噂り聲は、愈々激烈であつた。

「でも御座いませうが御前様、只今直と仰せ遊ばしては、餘りに事が荒立ちますでは……。」

篠江は、義理からのやうに遮つて居た。而も、双方の聲は、襖越しながら手に取る如く青年の耳に聞えた。

青年の唇は顫へた。その太き眉根と屈ぬ氣の眼は、「僕に何の不都合がある？」と、

言ひさうな意氣をすら示した。

「好し。和女が呼ばんなら、他の者に呼ばすぞッ。」

子爵は、机上の呼鈴に手を掛けて、ちりちりんと鳴らした。

「あら、左様に性急な事を遊ばさないでも……。」

篠江は、竟に遮りきれなくなつて、起上つた。その途端！青年も竟に心中の不満を抑へ得ずして、がらり襖を押開いた。

「叔父様、僕に御用ですか。」

「おッ、貴様は忠七郎ぢやの。」

子爵は勿論篠江も、忠七郎の出て來やうが餘りに突飛だつたので、思はず驚きの顔を見合はす。

「只今、お廊下を通りましたら、頻りに私の名をお呼びでしたから……。」
忠七郎は、セル袴の折目正しく子爵の面前にきちんと坐つた。

「おう、他の事でもないが、貴様は今日限り屋敷に置く事は出来んから、左様心得るが宜い。」

子爵は、嚴として坐り直つた。

「叔父様……。」と、忠七郎は、流石に膝の上の拳を顫はせ、

「そッ、そ、そりや一體怎麼なる理由で御座います。」

「理由は言ふまでもない。貴様の胸に問うて見い。」

「私の胸に……。」

忠七郎は、少時腕を扶いたが、別段思ひ當る節もないらしい調子で、

「私自身には、叔父様から放逐の宣言を頂くほどの過失も罪惡も犯した覚えは御座いません。」

「覚えがない？ 貴様は此上もまだ乃公を盲目に爲るる了簡か。貴様のやうな奴を屋敷に置いては、屋敷の秩序が紊亂するに依て、放逐するのぢや。」

「私の居ります爲めに、幸野原家の秩序が紊るゝと被仰りますので……。」

「然うちや。それ以外に言ふ事も聞く事も何もないから、今日限り立ち退け。」

子爵の見脈は、一語より一語と猛烈であつた。篠江は、幾びか口を挾まうと爲たが、挾むべき餘地を見出し得なかつたので、控へた。眼を俯して只折々窺むやうに、忠七郎の舉動を視て居た。

「……致し方御座いません。」

忠七郎は、本意なげに頭を垂れたが、然りては、直に席を起たうとする氣色もなかつた。

「ふゝむ。」と、子爵は、茶にしたやうな聲ばかりの笑ひを漏して、

「忠七郎、貴様は腹を立ちをつたらしいの。此屋敷を放逐さるゝのが、それほどに残念に思ふか。」

忠七郎は、緊く眼を瞑つたなりであつた。

「残念に思ふなら、行状を慎め。青二才の分際で、僭上至極ぢや。」
 「叔父さん……………」

忠七郎は、稍面を擡げた。その面には堪へんとして堪へがたき怒氣が溢れた。
 「叔父に對して、抗辯するののか。」

「いや、抗辯は致しませんが、行状を慎めと被仰られました只今のお語が、私には甚だ合點が参りません。情願、そのお語の御説明文をお願ひ致します。」

(八)

「白痴奴、中學時代から彼程に教へられた修身訓は、悉皆忘れて了ふたのか。」
 「忘れません。一言一句も忘れては居りません。」

「知つとるなら、乃公に訊く必要はない筈ぢや。」

「でも、私の教へられた修身訓と、叔父様の御解釋とは違ふやうです。」

「何ぢやと？」

子爵は、眼前に有つたグラスを手に取つて、既での事に、忠七郎が眉間の邊りへ投げ付けやうと爲た。

「御前様、あれッ。」

篠江は、見かねてその手に取絶つた。

「放せ。口で解らん奴は、暴力で懲しめて遣るんぢや。」

子爵の相貌は、正に鍾馗以上であつた。

「篠江さん、止めて下さるには及ばんです。叔父様が斯程までに御立腹なされたに

は、何か正確な理由があつての事です。その理由の緒だけでも、聞かして頂

かん事には、私は假ひ、叔父様から、打殺されても引退る事は出来ません。」

忠七郎は、穴勝に抵抗しやうと云ふ意志もないのであるが、恚慥にしても、叔父子爵の言ふ所が、不理窟の押通し詰であるので、何うせ引退るまでもこの決心で、小

楯を突いて見るのであつた。所謂青年血氣の口惜まぎれで。

「まあ、忠七郎様、左様な手強い事を被仰るものでは御座いません。後から又、不束な私でも、御前様に能くお話の徑路をお伺ひ申して、貴郎までお取次致す事に爲ませう。此場は何卒、何事も被仰らずにお退りになつて下さい。」

篠江は、一方に子爵の怒りを取鎮めるやうに爲ながら、一方には頻と飽なる配目を爲しつゝ、忠七郎の怒りを和ぐるべく努める。

『打殺されても引退らん？叔父に對して無法な事を嗜きをるの。その一言丈でも赦しては置けん。こッ、こゝへ出い。』

子爵は、遂に憤怒の頂上に達した。矢庭に羽織の紐を解き捨て、篠江を突き退けながら起ちかゝつた。

『あれッ、御前様、何う遊ばすんで御座います。』

篠江は、自分が一語口を交らしたが爲めに、此大騒動が持上つたのであるから、流

石に何處が何處までも打捨つては置けない。自ら子爵の前へ立ち塞がつて、懸命に忠七郎を掩護つた。

『御前様、忠七郎様をお懲し遊ばすなら、何卒その代りに私をお打ち遊ばして下さい。』

『退け、貴様を打つべき理由はない。』

『いえ、それでも私がお附申して居ります所で、斯様な事が出来致しましたので御座いますから……』と、篠江は、飽まで割て入つて、

『忠七郎様、後生で御座います。私を助けると思召して、何卒……何卒彼方へお退り下さい。御前様にも何卒、篠が可哀さうだと思召しましたら、も少々お鎮まりになつて、何なりとも御意遊ばして頂きたう存じます。それにあの、此様な事が、お屋敷中へ知れ渡りましては、第一御前様のお名前も出ます事で御座いますから……』

御前様のお名前と云ふ一語に、酔中の子爵も、不圖心附いた事があつたかして、振かざしたる右手の拳が、遽に沸湯の早殿と變つた。

「おう、貴様が夫程に言ふなら、懲しめる丈は赦して遣らう。こりや、忠七郎、寸刻も置く事は出来んから、疾く出て行け。」

(九)

「ですから、お置き下さいとは申さんです。理由さへお聞かせ下さりや……………」

「諄いッ。貴様の如き恩知らずの面を見るのも、不快でならんのぢや。」

子爵は、猛然として書齋を出て了つた。

「叔父様、恩誼は恩誼です。是までお世話を頂いた恩誼を仇で返すやうな心は微塵も有つちや居らんですが、理由なしの放逐とは、餘りに残酷では御座いませんか。」

忠七郎は、腕を扼して、叔父子爵の後影を見送つたのであつた。

「まあ、忠七郎様、其座事被仰らすに……………一旦は彼の様にお腹立になつても、又直にお癒り遊ばすのが、御前様のお癖で御座いますから……………」

篠江は、起ちかねた小膝を摺寄せながら宥めた。

「いや、御親切は難有いが、僕は僕の決心があるです。何奴か、屹度僕の品行上に就て、中傷譏誣したものに相違ない。今から、其奴を探り出して、素首を引抜いて遣るんです。」

忠七郎は、只憤慨の餘りに言つたらしいが、篠江は、我知らず悸乎として、眼を掩つた。

「然しです、篠江さん、君には飛んでもない迷惑を掛けて氣の毒でした。」

「何う致しまして……………私、本統に一時は何うなる事かと存じて、冷々致しましたわ。そしてあの、忠七郎様、貴郎は是から何う遊ばすお了簡？」

「何う遊ばすか其座事は分らん。乞食になるか、屑拾ひになるか。篠江さん、僕は

失敬しますよ。」

何ば青年血氣の忠七郎でも、對手なしの喧嘩は出来ない。斯う言つて、突然席を起ち上ると、篠江は、今までにない慌しさうな顔して、然も低聲に、

「忠七郎様、豈夫に是から直、お屋敷を出てお了ひになるんぢや御座いますまいねえ。」

「は、は、置かぬと宣告された所に、男として居る事は出来んですよ。」

「それも然うで御座いますね……。」と、篠江は、一寸困つたさうに小首を傾げて、

「貴郎、先達て私から差上げた手紙を御覽下さいまして？」

「いや、其麼物は見ません。」

忠七郎は、重ねて勃如と爲たらしい口態。

「あら、御覽下さいましたでせう。」

「真個、知らんから知らんと言ふんです。元來、一ツの家に棲むごる人間と人間と

が、手紙の往復を爲ると云ふ必要はないぢやありませんか。」

忠七郎は、疊を蹴つて、すたくと襖の外へ出て行く。

「もしッ、忠七郎様、今霎時……。」

篠江は、用ありさうに後についで、忠七郎の袂を控へた。と、此時、奥の室の方から、秀勝子爵の篠江を呼び立つる聲が激しく聞えた。

「篠江さん、君は一體叔父様の側を寸刻も離るゝ事の出来ん身體ぢやないか。遅く

彼方へ行つたら可いでせう。」

「まあ、忠七郎様、其麼酷たらしい事はつかり被仰らないでも、可いちや御座いま

せんの。」

艶なる篠江が眼元には、無限の怨みさへ含むだ。

「僕には、何の事か毫も解らん。左様なら、失敬。」

忠七郎は、ふり／＼と爲ながら、後をも見ずに、玄關の脇なる自分の書齋へと急い

だ。

(十)

「叔母様、忠七郎です。まだお寝みにはなりませんですか。」
棟續きではあるが、殆ど別宅も同様に看做されて居る子爵夫人喜久子の居間は、此
開けたる世に、電燈の設備さへまだ爲てないかして、茫然とした灯影が、淋しく障
子に映つて居た。

「忠様ですか。お珍しい事、まあ此方へお入り……………」

その聲は、正しく喜久子夫人であつた。忠七郎は、徐かに障子を開いた。

「叔母様、突然お驚かせして済みませんが、お暇乞に出ました。」

「何事です、お暇乞とは……………」

喜久子夫人は、徒然の餘り手ずさみがてらに捻くつて居た編物を下に差置き、今方

其處へ寢せ付けたばかりの、乙娘雛子の夢を覺さじとやうに前に進んだ。

「學校の方の御都合で、何處か下宿でもなさるの。」

「只然うぢや御座いませぬ。今日限り叔父様から、放逐の宣告を受けましたので、た
い今荷物なども概略取纏めて参つた所です。」

先刻、叔父子爵と論判した時の忠七郎とは、大分に違つて落着ては居るが、それ
もまだ眼の色と云ひ、聲の調子が、決して平生でなかつた。

「叔父様から放逐……………まさか。」

寢耳に水の喜久子夫人は、直にそれを實際であるとは、思はぬらしい。

「叔母様、實際です。叔母様には又、子供の時から我子同様の厚いお世話を受けま
したので、態々お暇乞に出ました。」

「忠様……………そりや本統のお話？」

「明日からは、叔母様のお顔を見る事も出来なくなりましたのです。」

激した忠七郎の眼には、一滴の涙が宿つた。

『まあ、何うしたら可いんでせうね。何か忠様の身に、叔父様のお氣に召さぬやうな失敗事でもあつたのですか。』

『それが解つとれば、何とも思はんですが、叔母様、僕はざッ、残念でならんのです。』

『何とも解らないで………只放逐………』

夫人は、深き同情の眼を以て、少時熟と忠七郎の顔を見て居た。

『突然も突然、藪から棒の話なんで、辯解の餘地も抗辯の餘地もないのです。何者か、僕の事を中傷したものとほか思はれんですが、それとても素より證據のない事ですから、奈何とも致し方がありません。』

忠七郎は、簡短に叔父子爵と反抗的態度を以て議論した事から、側にお寵愛の篠江が附纏つて居た事まで、一通りを物語つた。

『お聞きすればお聞きするほど、辻褄の合はぬお話ですけれども、彼の素性も得知れの篠江が、忠様の爲にそれ程骨を折つて、仲裁すると云ふのも、何だか妙に不自然のやうに思はれますね。』

夫人は、流石に眼の付け所が敏い。

『然うです。僕も多少はその感じがあつたですが、事に依ると、中傷者は彼の白狐かも知れんです。元來彼奴は不都合な奴ですからね。』

『その不都合な白狐に、貴郎の叔父様は宛然狂人のやうに夢中してお在るんですから、困つちまふではありませんか、まだ同じ何でも、生れた儘の小壽美の方ならば、行末までの心配は無いんですけれども………』

喜久子夫人は、青菜の如く萎れ返つて、雛子の寝顔を願ひながら、細い溜息を吐き流した。

「お察し致します。世間からは嚴格此上もない人の如く見られてお在の叔父様でも、一度び家庭の裏面を窺へば、是なんですからな。」

忠七郎も、同じやうに溜息を洩らした。

「私なども、世間普通の人に言はせたら、立派な子爵夫人として、苦勞の苦の字もない幸福な婦人のやうに思はれて居る事でせうが、忠様、實際と外見とは酷い違ひのものですね。」と、夫人は、窃と臉を拭つて、

「子供達はまだ此通り小さいし、まさかの時には、何かの相談相手に成て頂くと簡で、心丈夫に思つて居ましたのに、忠様が愈屋敷を去つてお了ひになつたら、私は本統に離れ小島の鳥です。」

「いや、其塵事もないでせうが、叔母様、僕の居らなくなつた後でも、彼の篠江と

いふ奴には、充分御注意をなさらんと不可んですよ。」

「難有う。私も既うそれに就いては、種々と苦心して居る所なんです、下手な事を言ひ出しては了ふと、一概に唯嫉妬かなどのやうに看做されてしまふので……忠様、何とかして、叔父様にお詫を申して、屋敷に居て下さる事は出来ないでせうか。」

「それは到底駄目です。兎に角貴船の伯母も東京に居る事ですから、一應相談を爲た上で、身の置場を取極めるより外ありません。叔母様も何卒、お身體を大切に爲て下さい。」

「あ、私さへ這麼境遇でないなら、命に代へても旦那様にお鍵りして、貴郎に永久屋敷に居て頂くやう取計ふんですけれども……御覽の通り、生きて居るか死んで居るかも分らぬやうな立場に漂つた居るんでは夫も叶はず……。」

夫人は竟に顔を抑へて、溜々と泣き沈む。忠七郎も、覺えず眼を瞬いた。

「今追ひ出されて行く僕よりも、叔母様のお身がお氣の毒で堪りません。ですがね、叔母様、何時かは一度叔父様のお目が醒める時節も有るでせうから、その時節をお待ちになるが可い。僕のような者でも、及ばずながら又、叔母様の爲めに盡したい考へで居りますから……」

「忠様、お語丈でも、本統に……本統に私、嬉しう思ひます。」

「呉れなくも、篠江と云ふ女には、お氣をお付にならんと、子爵家の運命にも關るやうな事を仕出來さんとも限らんですからね。」

忠七郎は、不圖机の上の置時計を眺めて、意外に時過ぎて居たのに驚き、

「叔母様、何れ御恩をお返しする時も御座いませう。それでは、是でお暇を申しませう。」

「では、何うしても今晚の中にお引拂ひになるんですか。」と、喜久子夫人は、涙を拭はんとせず、手元に有合した手製の編物——花形の肘蒲團だの、手袋だの、

二三種を取纏めて一包みに爲ながら、

「忠様、お餞別と云ふ譯ではありませんが、私の手製ですから……」

子爵夫人のお餞別としては、餘りに簡單に失するやうだが、忠七郎は、臆寸断の思ひを以て、泣きながらそれを貰つた。

(十二)

一體忠七郎の父は、幸野原子爵の異母弟で、男爵賤機家の養嗣子となつた人であるが、不幸兩親共に早世したので、家督は當然の結果として、長子孝一が相續する事となり、次男に生れた忠七郎は、十四五歳の時分から、骨肉の叔父に當る幸野原子爵の許へ引取られたのであつた。

勿論、その當時はまだ、秀勝子爵と喜久子夫人との間に、子供と云ふものがなかつたので、子爵は殆ど自分の子供同様に可愛がつて呉れたが、其後間もなく、本統の

子供が、一人ならず二人まで出来て見ると、憎むではないが、自然忠七郎の方は夫程に可愛くなくなつて来た。それに、忠七郎も段々大人びて来て、世間の事情など知つて来るに連れ、時には随分叔父君の御機嫌に觸れるやうな事も仕出来し、口でも言ふやうになつたので、是と云ふ明かな區劃こそ立たぬが、次第次第に心と心の情味が薄らいで来た。爲めに、一ツの家に在りながらも、用のない時には、三日でも四日でも顔を會さずに居た事さへ往々あつた位で、一口に言へば、子爵自身も、此頃では忠七郎なる者に、餘り重きを置いて居なければ、忠七郎も亦、死んでも叔父の家にごびり付て居やうとは希つて居なかつた。併し實家の當主たる兄の孝一が、兎角に自分と意見が合はないのみならず、何かに付け姑息一方の性質で、病氣静養の名の下に、野州小山在の別莊地へ引込んだがり、殆ど東京へ遊びにすら来た事がないので、自分が豫て目的を爲る學術の修業を了らぬ間は、迂濶に叔父の家を飛出したところで、差當り行先にも困るやうな次第であるから、兎も角もして今日まで

は辛抱して居た。處が、今日突然にも、身に覺えなき罪の爲めに、放逐の宣告を與へられたので、威張ては見るもの、内心は少々恐慌を來さざるを得なかつたのである。然りながら、已むを得ない。早晚來るべき運命が、豫期以上早く循環して來たものと斷念めて、久しく住馴れた子爵邸を引拂ふべく決心を定めた。否、引拂ふより外詮術がなくなつて了つた。喜久子夫人から、涙の餞別を貰ひ受けた彼は、再び自分の書齋へ歸つて、概略取纏めてあつた机や、書函や、其他の手道具やを一括りにして、最後に家扶の古河と云ふ老人に丈暇乞を告げやうと思つて居ると、するりと登音もなく、入口の襖を開いた何者かゝあつた。恰度此時、忠七郎は、破壁の側に立てかけてあつた油繪の額を新聞紙に押包まうとする處であつたが、不圖襖の開いた音に氣付いて、顔だけを後方に振返つた。

「御免遊ばして下さい。」
 聲音ばかりでなく、氣色も共に四邊を氣遣ふらしい態度で、小壽美が其處に兩手を支へて居た。

「和女、小壽美さんぢやないか。何か用かへ。」

「はい……………少々。」と、小壽美は、面差さうに高島田を垂げつゝ、

「蔭ながらちらと承はりますれば、今晚限りお屋敷をお引拂ひになりますこのお話で御座いますが……………」

「は、は、は、御覽の通りだよ。永い間お世話になつたが、急な事だね。」

「まあ本統に……………」

小壽美は、只々呆れ果てた面色、何とも言はずに胸を押へた。

(十三)

「小壽美さんは、今居るお侍女の中でも、一番故參だから、従つて僕なんかも、餘計お馴染の深い方だが、急に這麼譯になつたんでね。」

忠七郎は、苦笑しながら油繪の額を包むで居た。

「本統にお名残惜う存じますので、一寸なりとも、お別れの御挨拶を申上げやうと思つて參じましたので御座います。」

小壽美は、斯う言ふ間さへ、頻と前後に心を配つて、落着かぬげに見られた。

「そりや、御親切に難有う。僕も本統なら一々お暇乞ひを爲にやならん筈だが、餘り名譽の退却でもないから、控へて居た所さ。」

小壽美は、思ひ切つて敷居の内へ身を躡つた。

「忠七郎様、貴郎は是から何方へお越し遊ばすんで御座います。」

「まだ、自分ながら確乎とした事も極めちや居らんが、差當り青山の伯母の許へでも行かにやなるまい。」

「まあ、左様で……。そしてあの、御當家の方へは、滅多にお越しにはなりませんので御座いますか。」

「無論、一生涯來ぬかも知れない。」

「まあ……。と、小壽美は、いたく失望の態で、驚きの聲を嚙み下した。忠七郎は、稍改まつた調子で、

「時に小壽美さん、聞けば和女は大變叔父様のお寵愛ださうなが、まあ折角御奉公を大切に爲るが可いよ。」

「あら、忠七郎様、それは篠江さんとお間違ひになつてお在遊ばすんで御座いませう。」

「いや、篠江さんは篠江さんで別な話さ。併し其塵事は敢て僕風情の關する所ではないがね、和女、當家の奥様を氣の毒と思ふ心があつたら、少しく其邊の斟酌も爲てね、奥様の方の御不利益にならぬやう心懸けて呉れんと困るよ。生意氣な事

を言ふやうだが、此上僕でも居らんくなつたら、此廣い子爵家の邸中に、彼の時代遅れの古河以外男らしい男と云ふ者は一人も居らんくなつちまふんだからね。」

忠七郎は、今追ひ出されて行く身にも、尙喜久子夫人の果敢なき將來を氣遣つて、それとはなしに釘を打つたのである。

「それは私も能く承知して居ります。その事に就きまして實は……。と、小壽美は、例の紅を刷いたやうに顔を赤めて、

「……出来ます事なら、貴郎にお願いを致して、私の親の方から、お暇を頂きに参るやうお取計らひを願ひたいので御座います。」

「なに、お暇を頂きに……。？そして、和女は何うする丁簡かね。」

「假ひ、何う致しますまでも、私は只今の儘で居ります事は、奥様に申譯が御座いませんばかりでなく、自分の良心に咎めて、静乎としとる事が出来かねますから……。」

成程、小毒美の天性としては、爾あるべきである。忠七郎は思つた。が、併し、小毒美の爲めには、それが幸福であつても、喜久子夫人の爲めには、篠江の如き素性も異體も分らぬ白狐に跳梁跋扈せしむるよりは、溫柔な小毒美を子爵の傍に置く方が、まだしも好都合であらうとも思つた。喜久子夫人の意見も亦其處にあるので。

「小毒美さん、そりや不可よ。今も言ふ通り和女の現在は、只のお女中奉公とは譯が違ふからね。」

「で御座いますから、私は一時も早くお暇が頂きたいので御座います。」

「なか／＼、叔父様が承知なさりや爲んよ。和女が眞實其心で居るなら、是から先奥様の味方となつて、奥様を助けて上げるやうに努めて呉れるが、一番好いんだ。僕の頼みだから、然うして呉れ給へよ。」

(十四)

「奥様のお味方と申しましても、私のやうな不束者には……………」

「いや、其塵事はない。僕が居らんくなつた上に、小毒美さんまでも居らんくなつたら、奥様の爲めに、誰一人として、お話の對手を爲る者さへ無くなつて了ふんだからね。」

「と申しました所で、その私から既に、奥様のお目には、仇敵も同様に看做されて居りますのに違ひ御座いません。矢張私は、お暇を願ひますが、何よりの望みで御座います。」

小毒美は、到底篠江の如き才子肌の女と拮抗して、色香を競ひ、權威を争ふなど、云ふ資格のないことを自覺して居るのみならず、逆さに挿した松の木に根が生えるときがあつても、子爵夫人の地位を横奪して、己れの虚榮心を満足せしめやうなど、云ふ野心は、薬ほど無いのであつた。まだそればかりではない、小毒美は元來、白糸の生娘であつた時分から……………深き想ひを此忠七郎に運むで居たのであつた。

けれど、今よりも一層乙女氣であつた彼女には、素態にさへ、その心持の十分一を表はすべき術を知らなかつた。不知火の燃ゆる念を小さき心に秘め疊むで居る間に、思ひがけなき權威の壓迫が、無限の魔力を以て、無残にも無垢の天地から、恐しくも亦思はしき濁水の底に彼女を拉し去つて了つた。苔の枝はひし折られた。處女の操は、此時に於て穢されて了つた。泣いたとて笑ふたとて、もう追付く事ではなかつた。忠七郎に對する戀の初一念に變りはないとしても、その穢された身を以て、何うして圖々しく言ひ寄る事が出来やう。蓋せられた竈の火は、竟に燃え出づるの時なく、消え果つるの時なくして、只憧憬の犠牲となり了つたのであつた。忠七郎が今日、子爵家を引拂ふに莅むで、此處まで別れの挨拶を述べに來たのさへ、羊の如く溫柔なる小壽美としては、實に破天荒の仕打であつたのである。

「其處に無理矢理にお暇を貰つて、和女一體何うする氣なんだね。」

「私………尼に成らうと存じます。」

「は、は、は、明治の佛御前が出来上らうと云ふのか。して見ると、叔父様は平相國の役廻りだ。」

忠七郎は、元來小壽美の眞意も知らなければ、又多少知つたに爲た所で、それを自分の身に引付けて、解釋して見やうなご、云ふ氣は毫末もなかつた。

「左様では御座いませぬけれども………私。」

小壽美は、唇まで押寄せて居る或る辭を、言ひ出さうとして、又それなりに口籠つた。顔ばかりではない、耳朶から頸元まで、染めたやうに眞赤であつた。膝に置く兩手はぶる／＼と顫へた。

「まあ、さまざまの妄想に惱されしないで、僕が今言つたやうに、蔭ながらでも可いから、奥様の保護者になつて進げて呉れ給へよ。」

「……………」

小壽美は、悲しさうに、寧ろ怨めしさうに、忠七郎の顔を視上げた。

「小壽美さん、御前様のお召で御座います。小壽美さん……小壽美さん。」
 呼ぶ聲に驚かされて、とつかは起ち上らうとすると、何時、何うして此處に來たのか知らぬが、篠江がついお廊下の曲り角の所に、すゝい眼を光らかして佇むで居た。

(十五)

忠七郎が這慶事の爲めに、幸野原家を放逐されてから、約そ五日ばかり過ぎたる一夜の事であつた。最寵愛の篠江に肩を揉ませながらの子爵は、急に懐ひ出したやうな大欠伸一ツして、

「篠江、接かん事を訊くやうちやが、和女には兄とやら弟とやらがあるぞ云ふ話ぢやつたの？」

篠江は一寸手先を休めた。

「はい、只ツた一人の兄が御座いまして、つい川向ひの待乳山下に詰らない商賣を營んで居ります。」

「詰らん商賣とは……」

「は、は、は、お恥かしう御座います。」

「商賣に貴賤はない筈ぢや。勞働か月給取か、何ぢや。」

「ほんのその日稼ぎの魚屋を營んで居りますので……」

「うむ、魚屋か。魚屋が何で恥かしい事がある。彼りや、純粹の江戸ッ兒の爲べき稼業ぢや。名前は何と云ふ？」

「八十吉と申します。」

「八十吉……？勇みの名ぢやの。今度來たら、乃公も一度會つて見やう。」

「恐れ入りまして御座いますが、育ち柄で御座いますから、行儀作法の心得も御座いませので……」

「それが可い所ぢや。乃公なども華族の肩書こそ持つるが、至つて平民主義な事が好きで。」と、子爵は、少時眼を閉ぢて思案の態であつたが、

「魚屋とあつては、屋敷へなど引取つても、別段遣らせて置くべき用事もないが……」

「……和女の同胞とあれば、何かと物事は能く辨へて居るぢやらうの。」

「何う致しまして、艶もなければ飾りもない人間で御座いますが、二十一二の頃までは團子坂邊の植木屋に居りましたので、お庭のお手入位は少々心得て居りませうかも知れません。」

「うむ、豪駝帥の心得がある……？ そりや幸ひぢや、乃公の邸は和女等も見通り、一昨年の洪水以來荒れに荒れ果て居る所ぢやから、出入の豪駝帥は豪駝帥として、和女の兄を早速常備として屋敷に寝泊りさす事に致さう。和女から一つ話を爲て見い。」

「勿體ない事を……御前様、なか／＼御前様のお氣に入るやうな人間では御座い

ません。」

「なぬに、心配するには當らん。本人さへ差支なければ、乃公から能く古河にも申含めて置く。」

「御前様、そりや誠のお話で御座いますか。」

篠江は、棚から牡丹餅の落ちて来たやうな喜び顔であつた。

「何しに、乃公が嘘を言はう。明日にでも和女自身に出掛けて行つて、篤と相談して来い。」

「難有う存じます。」と、篠江は、子爵の前に坐り直して、心から嬉しさうにお禮を言上した。

「は、は、は、和女も存外の同胞思ひぢやと見えるの。」

篠江の嬉しさうな顔を眺めて、子爵は又それ以上に嬉しさうな笑を湛へた。

「本統に兄が承はりましたら、夢かごばかり喜びます事で御座いませう。」

「いや、然うばかりも言へんぢや。和女が其様に喜んで、本人の身になると云ふと、華族の邸など云ふものは、窮屈でばかりあつて、却つて面白からぬ感じを懐くかも知れんよ。」

斯う言つて居る所へ、家扶の古河老人が、半白の頭から湯氣を立ち昇らせつゝ出て来た。

「御前、御免遊ばしませ。私、一向に存じませんで居りましたが、奥様が日暮頃から、大熱をお發し遊ばして、餘程御重態の御容子で御座います。」

「なに、奥が大熱……？」

子爵は、流石に驚きの眼を睜つて、黒漆の鍾馗髻に波打たせた。

(十六)

「御前様、そりや大變で御座いますね。」

篠江は、黙つても居られぬので、義理づくに膝を挟むだ。

古河老人は、その顔をちろりと尻眼に睨むで、

「御前、如何致しませう。只今の處、小壽美さんが一人でお附致して居りますやうで御座いますか……。」

子爵は、少時腕組を爲て、考へ込むだが、

「小壽美が付いといれば、それで澤山ぢや。打棄つとけ。」

「それでも若しや……と申す事も御座いますし。お醫士を存じましてお勧め致しましたも、只それには及ばぬこの仰せで御座いますさうで……。」

「病人自ら醫士には及ばんと言ふ位ならば、高の知れた病性に極つとるんぢや。打棄つとけ。」

「でも、それでは餘りに……私輩まで斯うしてお側に居ります事で御座いますから……。」

「ぢや、お前等の勝手に爲たが宜しい。乃公は今日は肩が凝つてならんので、今篠江に按摩を取らして居つた所ぢや。篠江、も少し左の肩から二の腕の邊を擦つて呉れ。」

篠江は、故意と君命黙しがたき態を装つて、再び子爵の肩に絶つた。

此女が来て以來、御前様の御容子も一變すれば、奥様の御心痛も餘程度を加へた事は、愚直なる古河家扶にも、疾よりちやんと鑑定は付いて居たのであるが、切ては、御病氣の時丈でも、少しはお優しいお辭がありさうなものだと思つて居ると、斯の爲體である。彼は、胸中頗る不平であつた。

「併しながら御前、他の場合は違ひまして、遽かの御病氣にお罹り遊ばしたんで御座いますから……。」

「古河、貴様は相變らず諒い男ぢやの。乃公が打棄つとけと言ふたら、可いではないか。」

「……はい、左様では御座りますが、併し……。」

「併しが、何うしたんぢや。奥の病氣は彼りや、自分から病根を製造して、自分で苦しむるんぢや。水中の月を掴まうと思つて、自分で溺るゝ事を忘れくるんぢや。打棄つとけ。」

三太夫古河民之進、反對にお眼玉を喰つて、引退らざるを得ない事になつて了つた。

「御前様、それではおわるう御座いますわ。私でも何だかお引止め致したやうに奥様が思召しますと不可せんから……。」

古河家扶の引退るのを待兼ねて、篠江は、お世辭に這塵事を言つた。

「手前までが餘計な事を……。」

子爵は、一喝の下に叱り飛ばした。

すると、今度は小壽美が急ぎ足に出て来て、遙か敷居の外から恐るゝ、

「御前様、奥様が一寸御前様にお目に蒐りたいこの仰せで御座います。」

「何ぢや、奥が乃公に遇ひたい……？乃公は今身體の工合がわるく行かれんと言ふこけ。」

子爵の返答は、例に依て情なかつた。小壽美は、只もう恐れ入つて引退つた。

子爵の肩越しに、此態を観測的に見て居た篠江は、子爵家の天下はいよ／＼我手に歸するものと信じたのであらう、暗い方に向つて、得も言へぬ物凄く笑ひを漏らした。後頭に眼を有たぬ子爵は、勿論知らない。

(十七)

「篠江、肩はもう宜い。いろ／＼な奴が交る／＼出て來をつて、下らん事を言ふもんぢやから、折角和女との話を悉皆腰を折られて了ふた。それから何ぢやの、和女には、今言ふた兄の外には姉ぢやの妹ぢやの云ふ者は一人もないのぢやの。」

「はい……左様な者は、一人も御座いません。両親には顔も見知らぬ時分に死別

て了ひましたし、本統に只今では淡泊致したもので御座います。ほ、ほ、ほ。」

「いや、惹ひな繫累のないのが、却て身の幸福ぢや。聞けば、彼の小壽美など云ふ奴は、相當の家に生れたもんじゃないが、弟妹ばかりも三四人あると云ふ話ぢや。」

子爵は、大熱に惱むで居る夫人の事は全然忘れて居給ふのであつた。

「まあ、小壽美さんには、その様に多勢の御弟妹がお有りなんでせうか。」

「ぢやもんぢやから、親の手元はなか／＼苦しいらしいぢや。乃公もの、それを聞き知つて居るので、先達て忠七郎との一件があつたにも係らず、片手落の裁判ぢやあるが、彼女の方は、大目に見過して黙つとつて遣るんぢやての。」

子爵に果して是程の慈悲心があるなら、夫人の病氣に付いても、も少しは何とか有るべき筈であるが、木偶の愚鈍のと、口先で言ひ蔑すほど小壽美に對する子爵の愛情は、決して衰へて居るのではないと、篠江は思つた。

「致しますと御前様、小壽美さんを彼の儘でお置き遊ばすのは、小壽美さんの御弟

妹や何か、澤山にお有りの爲めなんで御座いますか。」

眞向に一本参られたので、子爵は、一寸たちろぎの氣色だ。

「ま、まあ、言うて見りや其麼ものぢやよ。けれど、和女はそれが爲めに、少しも心配する事はありや爲ん。」

「いえ、決して心配は致しませんけれども……。」と、篠江は、此處甚だ氣の濟まぬ顔して、

「何と申したつて、小壽美さんの方が美人でも被在いますし、荅の花の可愛い頂上で御座いますからね。」

「は、は、は、和女にも似合ん氣の小さい事を言ひ居る。」と、稍慰むるやうな柔かい調子で、

「何う間違つた所で、和女が扇の要なら、彼女等は骨ぢや。要になる和女さへ確乎しとりや、差支あるまい。」

「でも御前様、甚麼確乎致した要が付いて居りまして、その要ぐるみ秋の扇と捨てられるやうな事がありました……。」

篠江は、只今の奥様のやうにと、附加へたかつたのを控へた。

「莫迦な、其麼事があるものか。其麼事のない保證の爲めに、和女の兄までも屋敷へ引取らうと言ふんぢや。」

「御前様、必ずで御座いますか。」

「和女も古河に似て、諄いの。」

篠江は、にッと白い齒を出して、首肯くやうに笑つた。

子爵の眼には、それも月光の如く見えたであらう。

又しても、喜久子夫人の部屋から、他の小間使が走つて來た。

「御前様、奥様のお熱が、段々お酷いやうで御座います。情願一度お越し遊ばして御覽下さるやうに……。」と、言ひ了るを待たず、

『乃公は醫者ぢやない。』
子爵は、嘔み付くやうに嘔鳴り倒して、ごろりと篠江の膝を枕に代用した。

(十八)

喜久子夫人の病氣は、穴勝今日……明日と云ふほどでもないが、子爵の高を括つて居らるゝほど軽々なものではなかつた。日暮方に一度、真夜中に一度位は、時刻を限つて突發的に大熱を發する。何うかすると、卅七八度に達する事さへ珍しくなかつた。そして、熱の頂上に達した時には、落着いたその平生に似合はず、凄じい奇聲を發して、種々の嘔語を口走つた。醫士の診斷では、感冒に原因した一種の肺熱であらうとの事であつた。何にもせよ、熱の後の衰弱が烈しい。食物は流動物の他一切禁せられた。それから、稚い子供達は成るべく病牀へ近づけぬやうにこの注意さへ與へられた。總領の腕白盛り——三郎君と云ふのは、或る私立學校の幼稚舎

へ預けつきりであるが、二番目の雛子嬢は、寸の間たりとも母君の側を離れた例がないので、それを病牀から引放すのに就ては、看護の任に當つた小壽美を始め、召使輩の苦心が一通りでなかつた。加之、喜久子夫人それ自らも亦、雛子ばかりは、共に枕を並べて死んで了ふまでも、決して側を放したくないと言ひつゞけた。熱の劇しく出だした時の嘔語といふのは、先づ第一番に雛子の行末の事で、その邊りに雛子が坐つてゐるかのやうに、眼を睨り手を動かしながら、熱心に何や彼やと言ひ聞かせるのであつたが、滑稽どころではない、眞に涙であつた。

病み付いてからまだ五六日にはかならぬが、只さへも蒼白めた夫人の顔は、窓の若葉のそれ以上に眞蒼に變つた。眼は落凹んで、頬肉は削ぎ取つたやう。其中に取殘されたやうな鼻筋のみが、際立つて高く、際立つて鋭く尖がつて居た。唇は既う死人のやうに色がなかつた。

『奥様、少しは御氣分がお宜しう御座いますか。お薬を召上りましたら、如何で御

座います。」

「恰度今、疲れきつた病苦の夢から、現のやうに覺めかゝつた夫人の顔を覗いて、小壽美は物靜かに尋ねた。」

「……………小壽美かへ、私、餘程睡りましたらうかね。」

夫人は、懶げに眼を瞬いた。額から髪の毛まで、ぐっしよりと汗に濡れて居る。

「はい、三十分ばかり御寝になりましたやうで御座います。」

「然う……………」と、夫人は、力なく頷を動かさし、

「御前様が若しや、お越しになりは爲なかつたかえ。」

「はい……………」と、小壽美は、逡巡ひながら小聲で、

「……………お見えにはなりませんんで御座いました。」

「それでは矢張り夢だつたか知ら……………私が是ほどの病氣になつても、只の一度もお越し下さらないとは……………」

落回んだ夫人の眼からは、湧くやうに熱いのが流れた。

「奥様、その様にお力をお落とし遊ばさないでも、今晚あたりは、屹度お見舞遊ばす事と存じますから、まあお薬でも召上つて、元氣をお取直し遊ばして下さい。」

「いえ、私はもう断念めて居ますから、薬など服むのは、止めに爲ませう。それよりはあの小壽美、雛子が其處等に居ないでせうか。」

「はい、お嬢さまで御座いますか……………」

小壽美は、何氣なしに答へたやうなもの、お醫者から堅く禁じられて居る事を氣付いて、頓には立ちかねて居た。と、如何なる風の吹き廻しであつたか、噂の主の秀勝子爵は、珍しくもスリッパの音荒々しく母宅の方から遣つて來られた。背後には、篠江が金巻繪の蓑函を手を爲ながら附添つて居た。

「小壽美か、看護の役目は骨が折れやう。」

子爵は、先づ小壽美に一瞥を呉れて、それから徐に喜久子夫人の枕頭に進むた。夫人は、珍しき良人の聲を耳に挟むで、急がしく褥の上に起き上らうと爲たが、疲勞と衰弱とには勝てない。氣ばかりは燥つても、身體が利かぬのであつた。無理に起き上らうとして、枕に兩の手を支へやうとすると、生憎咽せ返るやうに咳が込上げて來た。小壽美は、見かねて嗽茶碗を把り上げて、夫人の口元へ差出す。がツと云ふ苦しい咳拂ひに連れて、夫人の口からは、澤山でもないが、まさしくしい赤い血が迸つた。

子爵は、眉を蹙めて顔を反向けた。篠江も同じやうに、見て見ぬ態を爲て居る。

「あらッ、奥様のお口から……………」と、小壽美は、我を忘れて叫むた。

夫人は、眼で知らすやうに夫を遮り、手から手拭を把つて、額の膏汗を拭きつゝ、
「旦那様、能うお越し遊ばして下さいました。」

斯う言つたのさへ、漸どの思ひであつたらしい。

「奥、まだ快くないかの。」

子爵は、初めて慰めらしい辭を掛けたのである。

「はい……………難有う……………」と、水を離れた魚のやうに、肩で幽かに呼吸を爲ながら、

「旦那様、私はもう此通りになつて了ひました。到底もう……………快復の見込は御座いません。」

「は、は、は、其麼氣の弱い事言ふ奴があるか。病氣は氣のもんぢや。」

「それでも最早……………此通りに手足までが細釘のやうに……………」

「それや和女、喰ふ物を喰はんで、寝てばかり居るんぢやもの。手足の瘦せるのは當然の事ぢやが。」

其實、子爵それ自らも、斯程までに手酷く衰弱して居やうとは思はなかつたのであ

るが、此實状を見るに及んで、流石に可哀さうなど云ふ念の起らぬでもなかつた。夫人は、折々落回むだ眼を睜つて、良人の背後に控へて居た篠江の姿に注意するらしく見えたが、然し、口へ出しては一語も言はない。

「時に、奥、乃公が今日和女を見舞つたのは外でもないぢや。何うも醫士の説に依つて見ても、和女の病症は幾分質の好からん所もあるやうぢやから、二三ヶ月の間病院に入つた方が可からうとの事ぢや。和女、病院に行くのは異存あるまいの。」

「御親切の段は忝なう御座いますが……。」

「忝ないが……。厭ぢやと言ふのか。」

「……はい、同じ死にまするものなら、私はお屋敷の中に居つて死にたう御座います。」

夫人の蒼白い頬には、ころ／＼と玉のやうな涙が傳はつて居た。

「何ぢやツ？和女を死なさうために、乃公は病院に入れと言ふのぢやない。全快さして舊の身體にならして遣らうと言ふんぢや。」

「到底、全快の見込みは御座いません。情願……。此儘にお置き遊ばして下さい。」

「置かんとは言はんが、此儘で置いては病氣が募るばかりぢやと、お醫士が言ふるんぢや。」

「お醫士は何と申しましたも私の命は私が能く存じて居ります。」と、夫人は自ら絶望の淵へ沈み行くやうな薄曇つた調子で、

「旦那様、私の身體に萬一の事が御座いました曉には、只ツた一ツの願ひが御座います。情願お聞き濟み遊ばして下さいまし。」

「は、は、は、遺言の取越か。ま、ま、あ、何事の願ひか知らんが聞いて置かう。」

「聞いて置かう………と、仰せ遊ばされずに、聞き届けてやると被仰つて頂きたう御座います。」

「は、は、は、酷く執念らしいことを言ふの、和女は。」と、子爵は、苦い笑ひを合ひで、

「ま、まあ、好いわ。病人の言ふ事ぢやから、聞き届けてやると爲やう。」
夫人は、淋しい首肯を返して、

「嬉しう存じます。暫時の内………二人の者を彼方へお遠ざけ遊ばすやう………」

「さまざまの難しい事を言ふ女ぢやの。二人共に暫時遠慮せい。」

小善美と篠江とは、命の儘にお次へ退つた。子爵は、一揺り前へ乗出して、

「喜久子、何ぢやの、和女の願ひと云ふのは………」

「………はい、實は………」と、夫人は、病みほうけたる細い手を枕の上に置き直して、

「旦那様、只今も申し上げます通り、私の此度の病氣は、感冒から惹起つたとは申せ、決して、昨日今日遽かに起つたのでは御座いません。到底今度と申す今度は………」

……快復の見込みは御座いませんから………私はもうちやんと覺悟を定めて居ります。就きましては………後に残ります二人の子供達で御座いますか………彼達の

行末を囑みますものは、私の見受けました所、齡は致しませんが………彼の小善美より外にはなからうと存じますので………御無體なお願ひかは存じませんが

………情願、彼の小善美をお取上げ下さいまして………末永くお側にお置き遊ばしますやう………是のみが私の最終最後のお願ひで御座います。『苦しげに言ひ了

つて、夫人はその力なき眼に、懇ふるが如く、子爵の顔を視上げた。

「何事を言ひ出すかと思へば、和女の願ひとは、その事ぢやの。」

夫人は、透き徹るやうな兩手を、額へながら合した。

子爵は、嘲笑ふやうに口を歪めて、

「輕からん病人の和女が、折角の願ひちやから、快く承知を爲てやりたいがの。喜久子、和女は何にも事情を知らんからこそ、左様な事を言ふとるんちや。』
 「事情と申しますと?。」

「いや、和女は、彼の小毒美を世間知らずの初心者ごのみ思ふとるかも知れんがの。彼女には和女、疾の昔から忠七郎と云ふ附物があるんちやよ。乃公もの、つい此頃までは、正直なうの奴ごのみ思うて、何も彼も信用しきつて居つたぢやけれど、不圖した事からそれが分つたので、乃公は早速忠七郎の奴は放逐して了ふたぢや。あッ、は、は、は。」と、子爵は、病夫人の耳も聳するばかりの高笑ひを浴びせた。

「そッ………それではあの小毒美は、旦那様のお目を掠めて彼の忠様と………そしてあのそれが爲めに………忠様をお屋敷から御放逐遊ばした次第で………」
 夫人は、胸も潰るゝばかりに一驚を喫した。既での事、褥を落ちかゝるばかりに身

を乗出し、

「旦那様、私には何うやら眞實のお話とは思はれませんやうで御座います。」

「嘘は言はん。何ほ和女が最終最後の囁みであつても、左様な人間に二人の子等が行末を託する譯にはゆかんでなう。は、は、は。」

(二十一)

只さへも病苦に疲れた喜久子夫人は、もう二の句を繼ぐべき勇氣がなかつた。落入るやうにがつくりと枕へ突伏たまゝ、身動きも爲すにあつたが、聽て幽な聲で、「致し方が御座いません」と、言つたぎり、復び良人の顔を視上げやうとも爲ない。子爵は、手持無沙汰の餘り、巻蓑を一本摘むで、髯の奥から烟を吹き出して居たが、流石にそれなりに席を蹴つて起つこともならない。で、前よりは幾分か慈愛らしい調子で、

「いや、喜久子、然うは言ふもの、和女の心持は乃公にも能く解つてゐるで、決してわるいやうには計はんぢや。ぢやからまあ、安心して大學なり赤十字なり、和女の氣の濟む方へ、入院すると爲たら何うかの。」

左も右もして、夫人を病院に入れて了ふのが目的であるらしい。

依然として、枕に突伏したなりの夫人は、靜かに只頭を揺かしたぎりであつた。窓の青簾を揺つて、黄昏の若葉の風は撫でるやうに夫人の蒼白い頬を掠めた。

「何うかの、喜久子。入院は何うあつても厭かの。」

「……………」

「返答も爲んのは、厭と見えるの。いや、それ程に厭なものなら、強てとは言はんぢや。まあ折角養生を爲て見い。」

子爵は、斯う言ひながら、柱に手を掛けて呼鈴のポツチを押した。と、間もなく、曩の二人は、相前後して出て來た。それと見た子爵は、

「小壽美、奥が又熱でも出て來さうな氣色ぢやから、氣を付けて呉れよ。」

小壽美は、小さくなつて恐縮し奉つて居た。

「おう、乃公は彼方に來客のある事を悉皆忘れとつた。」と、子爵は、故意に夫人の耳へ聞えよがしに言つて、一寸篠江に配目を爲ながら、情なくも病室を立ち出た。

篠江は、勿論それについた。

取残された小壽美は、一寸取付く島がなかつた。自分と篠江とが遠慮を申付つた間に、甚だ内密の相談が、奥様と殿様との對座に依て取交されたかは知らぬが、少くとも、奥様のお爲めに御満足の結果でなかつた事丈は、一目にして讀まれた。小壽美は、其事の自分に關係ありしや否は素より知らない。而も今、病室に歸つて、奥様の尋常ならぬ御容體を見ると等しく、何とも云ひがたい心細い感じが胸一杯に迫つた。

「もしッ、奥様、如何遊ばしました。又お熱が出て參つたのでは御座いませんか。」

「いえ、然うではありません。』と、夫人は初めて少しく落着いたらしい容態で、重さうに頭を擡げたが、亂れかゝる髪の毛を指先で梳き上げ、今更のやうに熟と小壽美の顔を凝視めて、

「ね、小壽美、和女はまあ飛んでもない事を爲てお呉れだ。もうく、今となつては、私が折角の苦心も水の泡となつて了ひました。』と、長い溜息。

「奥様、それはまあ如何やうなる事で御座います。』と、小膽な小壽美は、眼を圓くして、おづくながら差寄る。

(二十二)

「和女はまあ、何うした心得違ひで、忠様なご、人目を忍ぶ仲とお成りだ?』夫人の眼は、疑ひの光に充ちて居る。

「えッ、私があの忠七郎様と人目を……奥様、それはお間違ひで御座います。現

在御前様の甥御でお在遊ばす忠七郎様と、何うして左様な不都合を致しませう。誓つて……誓つて左様な覚えは御座いません。』

小壽美としては、恐ろしいほど堅固な語で、斯う言ひ切つたものゝ、他ならぬ忠七郎と怪しき縁故のあつた如く看做さるゝのは、何とやら又、行末の希望を達し得らるゝ前兆のやうな氣も爲て、娘心の胸が躍つた。

「然う……本統に覚えがないのだね? 正直な和女が夫程立派にお言ひのならば豈夫詐りではないでせう。けれどもね小壽美、それが爲めに忠様が屋敷を放逐されてお了ひになつたとすれば、和女は忠様の爲めに證明を立て、差上げなくては、濟まん義理ではありませんか。』

「奥様、何と仰せ遊ばします。忠七郎様のお屋敷を立退きになつたのは、私の爲めだと、斯様に仰せ遊ばしますので……。』

「いえ、私は然うは思ひませんけれども、現在今日那様がその様に被仰つてゝした

「から……。」
 「まあ、私何う致したら宜しう御座いませう。私の愚なせいでも御座いませうが、忠七郎様のお屋敷をお立退きになつたのは、真個外の譯があつての事とばかり存じて居りましたに……。」と、小壽美は、殆んど泣き出しさうな状態で、前髪を顛はせ、

「私風情の者は兎も角、是から學問を遊ばして、立派なお方にお成り遊ばさうと云ふ忠七郎様のお身に、その様な冤の罪をお被せ申しましては、私の義理が立ちません。奥様、私は是から直、忠七郎様のお越し先をお尋ね致して、充分にお詫を申して参りたう御座いますから、何卒暫時のお暇が頂きたう御座います。」

「あれまあ小壽美、其廢事をお言ひだつて和女、今日はもう日暮でもあるし……それよりはまあ、御前様の前へ行つて、實際其廢事がないならばないと、立派に證明を立てるのが、物の順序と云ふものです。それに……私だつて、此通り病

氣が段々重つて来るばかりで、此上和女に居なくてもなられた日には、屋敷中に誰一人……真面目の心で私の世話をしてく呉れる者もありや爲ません。」
 夫人は、今にも血を吐きさうな咳を爲しながら、絶るやうにして小壽美の燥つ心を押宥めた。

「はい……然う仰せ遊ばされて見ると、それも御道理では御座いますけれども、それでも奥様、私ゆゑに忠七郎様が、彼のやうな御迷惑を遊ばしたかと思ふと私はもう……坐ても起つても……。」

「だ……だから、小壽美、私だつて、和女の言ふ事がわるいとは言ひません。只、今の場合、和女に行かれて了つては、私が困るからと言ふんです。暫時時の來るのを待つて居て下さい。それに、御前様が假令何と仰せ遊ばさうと、私の和女に對する疑念丈は、綺麗淡泊と露れましたから……。」

「奥様のお疑念丈でも齎ますれば、私も是に越した喜びは御座いませませんが……併

し、何にも御存じのない忠七郎様に對して……………」。

「さあ、それも是も、洗つて見たらば屹度彼の篠江奴が策略に違ひありません。それを考へると、私はもう端たない限りご知りつゝ……………彼の女の顔を見てさへ、生がら取付いてやりたいやうな気分になつて來るので……………」。

夫人は、落凹んだ眼に母宅の方を熟と睨むで、我知らず手巾を強く握つた。

(二十三)

「哥兄、起きねえのか、まだ……………」。

上總戸の半分開けてある土間の入口を覗いて、めくの鯉口に突掛草履の、見るからにいなせらしいのが聲をかけるぞ、

「新さんかへ、關はず入んねえ。朝寝坊の看板男が、今日に限つて莫迦に早えやうだの。」

薄暗い六疊の間に、蛻の蒲團も其儘、立膝を爲ながら、「あやめ」の袋から糞を摘み出して、真鍮の雁首に詰めて居た主人の男は、厭な顔も爲すに此方を顧つて答へた。

「餘り早くもねえのさ。朝湯にでも一杯飛込んで來やうかと思つてね。」

「まあ可いやな、一服喫つてさねえてこと。」

「然うかえ。ちや一服……………」と、新さんは、敷居を跨いで土間へ入つた。

「新さん、お易い御用だ。陰氣で不可ねえから、戸を悉皆開けといて呉んねえ。」

「よし來た。」と、新さんは、氣輕に兩戸を繰開けたが、土間に投げ出してあつた魚の板臺と血の乾び着いて居る出刃に眼を付け、

「おい、八十哥兄、近頃お前は稼業の方はどんたくと見えるね。魚屋の板臺や出刃が乾びきつて居るなんざあ下さらねえ。」

「莫迦を言ひねえ、ちやんと奴が仕送つて呉れらあ。」

「おい、朝惚は脚氣の藥だと云ふが、俺アまだ衝心する程ちやねえんだ。」

「その代り、骨組みで惱むでるんだらう。見ねえ頂上の毛が薄くなつて来た事。」
八十哥兄は、真鍮煙管で脂下つた。

「は、は、は、相變らず口から税の出ねえ玉だね。餘事は倍措きの八十哥兄、お前も斯うして永え間獨者で辛抱してゐるんだが、素敵なのが一人あるんだよ、何うだえお篠さんの代りに貰つて見る氣はねえかな。」

「ロハなら貰つても可いね。齡は幾歳だ。」

「齡は二八か二九からぬ……どちやんご爲永の叔父さんの正札通りよ。」

「賣人か素人か。」

「賣人にあらず素人にあらず、豹にあらず虎にあらず……。」

「ふむ、猫にあらず舐にあらずだらう。お前の定文句なら此方で先刻御承知なすつてらッしやらあ。」

「大道の茹小豆ちやあるめえし、交せッ返しッこなしだ。是でも俺ア神聖な了簡で

話を爲てるんだからね。」

「ちよッ、神聖が跣足で逃げらあ。だから新さん、申談は申談として、まあ聞きねえてこと、俺は、斯う見えても、今日か明日の中に、魚屋は廢業して了ふんだ。」

「哥兄、御申談でげせう、魚屋の自由廢業なんてのは、此節廢つてるよ。」

「でもお前、運の向いて来る時にや、鰻の胃囊から黄金の大黒が飛出す事もあらあ。長屋中を始め、お前なんかにも散々腹世話をかけたが……まあ嘘と思ふならこれを見ねえ、此の通り白木へ詠えてよ、双子でこそあれ、羽織も着物もお揃ひの切立てよ、博多の一本獨鉢も此通りだ。是を着てお前ンとけえも暇乞に行くから、その時喫驚して眼球をでんぐら覆さねえ様に頼むよ。」と、八十哥兄は、其處に在つた新調の双子縞一揃ひをたごう紙から引張出して、得意さうに示した。

(二十四)

「成程嘘ぢやねえや。そして何か、埒まで何處かへ引越して了ふのか。」

「おほん、もちでげすと云ひてえ處だが、實は直眼前の川向ふよ。」

「川向ふなら向島の土手だね。まさかに土手の草刈人夫ぢやあるめえ。」

「草刈人夫に這麼綺羅が要るもんかな。斯う見えてもの、或る華族様のお屋敷へ御用人見習生にお召抱になるんだ。月給が百圓で、お手當が五十圓さ。」

新さんは、ヘーッと言つたざり烟に巻かれて、眼を白黒に爲て居た。

「恐れ入つたらう新さん、平生は魚屋を爲て居ても、武藝百般の嗜がありや、いざてえ時にや此通りだ。」

「は、は、は、飛んだ勝田新左衛門だね。哥兄、素見や夜の事だよ、朝腹に友達を擔ぐなあ可くねえ。」

「ふ、ふ、ふむ、まだお前は俺の言ふ事疑つてるのか、論より證據明日まで待つて見なせえ。」

八十哥兄は、雁首を叩いて澄し拂つた。新さんは、狐にでも魅まれたやうな眼付で、尙情々と八十哥兄の顔を覗いて、

「何が何だか、俺にや頼ご意味が解せねえが、それが本統に掛値なしの話なら、友達

甲斐に一杯位買つても好かりさうなもんだね。」

「大買ひよ。だから疾く湯にでも入つて来て、歸りに寄りねえ。」

「難有え、道理こそ昨夜は玩具の飛行機で天上した夢を見たよ。」と、新さんは、大急ぎに溝板を鳴らして、横町の松の湯へ走つた。

「あッは、は、は、新公の奴悉皆恐れ入つて了ひやがつた。」と、八十吉は、「あやめ」の烟を輪に吹いたが、やがて、火鉢の側に置いてあつた貧乏徳利を引寄せ、有るか無きかを氣引で見ながら、

「まだ五の字は確かだ。」と、蒲團を足の先で引まろめて押入に投込み、バツ／＼と二ツ三ツ跡を掃き出す真似して、真中へ脚のぐら付く食卓を直した。

「は、は、は、宛然緞帳芝居の道具立て居やがらあ。」

八十吉は、獨で呟いて、獨で笑つた。然う斯うして居る間に、氣の早い新さんは、金太郎の様な顔して、湯から馳せ歸つた。

「八十哥兄、仕度は出来たかね。」

「虫の好い事言つてやがらあ、其處等へ行つて肴でも見繕つて来ねえ。」

「然う来るだらうと思つて、煮豆屋の老爺さんを引張つて来たよ。佃煮に晝漬でも買つとさねえ。」

何様、煮豆屋の老爺がちりん／＼を鳴らしながら、新さんの後から跟いて来て居る。で、八十吉と新さんは、好勝手な太平樂を並べながら、ぐびり／＼と呷り始めた。そして、正午頃までに到頭三升餘りを平げた揚句が、騒がなくては酒が不味いとは

かりで、向新道の若い清元の師匠を引張出して来て、一層大陽氣に騒ぎ立つたのである。驚いたのは、長屋中の山の神連で、年が年中十錢づゝ日掛の家賃さへ滞りがちの八十吉と縫箔屋の新さんが、賭博にでも勝つたか、泥棒でも爲なければ、這麼に大騒ぎの出来る筈はないと蔭口を利くのもあつた。

今しも、八十吉は師匠の三味線で、得意の咽喉を轉がしながら、大濫に「三千歳」か何かを迂鳴始めて居ると、突然、路次口の所に俵を乗捨て、四邊へ極りわるさうにして、瑠璃色の深張傘に面を遮りながら、千代田草履の蹻音も静かに、しやなり／＼と入つて来た一個の婦人がある。誰あらう、篠江であつた。

(二十五)

「哥兄、大變だ。お篠さんが御入來遊ばしたせ。」

眞先に目を着た新さんは、頬張た酢章魚を鵜呑に爲ながら、八十吉の脇を突いた。

「なに、お篠が……。……。」
 八十吉は、折角佳境に入りかけた「三千歳」をばたり止めて、戸口を振り返つた。篠江は、可笑しくもあるが腹も立つやうな氣色で、權のある眼に一種の凄味を含せながら、内へ入つた。

「お匠さん、御機嫌さま……。」

「まあ、貴女こそ。暫時お目に掛らない中に大層お變りになつたので、お見外れ申しましたわ。」と、師匠は、三味線を側へ押遣りながらの挨拶。新さんは、割込むやうに膝小僧を進めて、

「本統に變つたの何のツて、僅かの間に悉皆お屋敷氣質の上品粧りになつたのが不思議だ。他人の俺でせえぞくくするほど嬉しくて堪らねえから、八十哥兄の目から見た日にや、觀音さまの再來だらうよ。」

「厭な新さんですね、人の顔を見るより早く……。」と、篠江は、ちよいと新さん

の肩を叩く真似して、その癖、眼には八十吉の酔拂つた顔を睨むやうに見ながら、

「此人も随分暢氣千萬だわね。本統に私の氣も知らないでさ。」

「何が暢氣千萬なんでえ。」と、八十吉は大分上々の御機嫌で、瞳をいやに据らせたが、又直ぐに氣を轉へて、碎けた笑ひを見せつゝ、

「……とは言ふものよ、お屋敷へ上つて了えば、安心な酒も飲まれねえと思ふから、今日は娑婆の飲み了えに、氣の合た新さんと二人で、うむと飲み始めた所へ、お匠さんの顔がちらりと見えたので、次手に娑婆の迂鳴り了えに、「三千歳」を半分ばかり浚つて貰つたまでの話よ。」

「何ですなえ、飲み了ひだの迂鳴り了ひだのツて、それちや全然監獄へでも行くやうな了簡でお在のか。」

「當然よ。監獄へ行くよりまだ辛からうと思つてるんだ。」

「縁喜でもない、可い加減にするもんです。」と、篠江は、故意とつんど爲た容子で、

衣服の襟を一寸退らせ。

「折角皆さんとお酒宴の最中だけごね、いろ／＼夫に就て、打合せを爲さきたい事もあるんだから、お前さん、圖部六に酔ってお呉れだと困るわ。」

「大丈夫だてこと、新さんと二人で、今朝から平げた酒が、まだ五升にやなりや爲ねえ。」

「お巫山戯でないよ。その上飲んだらへご／＼に成ちまふぢやないの。」と、篠江は、いよ／＼眞面目な調子で、

「誠にね、新さんには面當がましいやうですけどごね、家の人には、差當つて少しばかり用向があるんですから、晩にでも又緩りと飲み直す事に爲て頂戴な。」

「は、は、は、然う姉御に……ぢやなかつたお篠さんから改つた御口上では、恐れ入谷の朝顔人形、花の凋まぬ中に引退ると爲やせう。お匠さん、お前さんも一緒に何うです。」

新さんは、流石に粹を通した了簡で、清元の師匠を引連れて歸つた。

跡は少時火の消えた様に淋しかつたが、篠江は、やをら席を起つて、其處等に散ばつて居る徳利や小皿を片端へ押寄せ、

「ちよいとお前さん、坐睡りをしちや困るわ。何事も初手が大切なんだから、確乎して聽いて居て下さいよ。」

「誰が坐睡りなんか爲るもんけえ。」

活を入れられたので、八十吉は稍身構へ直した。

「それぢや可いけどごね、お前さん、幸野原の御前と来た日には、見た所は彼の通り怖らしいばかりで、何事も粗放一方のやうに思はれるけれどごね、外見と氣質とはそりや随分反對なのさ。其處を能くお前さんも呑込んで居ないと、大變だわ。それね、夢の中の囁語にだつて、私とお前さんが、眞實の兄妹でないやうな事でも口走つた日には、甚麼騒ぎが持上るか知れや爲ません。だからね、お前さん

は何處までも私の實の兄さん、私は何處までも實の妹の了簡で、お臺所の猫にだつて氣取られないやう注意に注意して下さいよ。ほ、ほ、本統に可くて？」

「可いとも、その御念にや及ばねえやな。」

篠江の懸命な割合に、八十吉は頗る安請合であつた。

(二十六)

「お前さん、上の空で聞いてや爲ないの？ 虫の好い事を言ふんぢやないけど、此の骨牌が一ツ旨く目が出りや、私や一足飛びに子爵夫人に成れやうと云ふ大切の境目なんだからね、今までの魚屋根性は悉皆打捨つて了つて、子爵夫人のお兄様氣取になつてお呉れでないご困るわ。」

篠江は、嬰兒でも賺すやうに、諄々として説き立つるのであつた。

「しち諄え女だな。その場合になりやなつたで、人間てえ者は何うにでも融通が付

くもんだから心配しなさんなよ。」

八十吉は、尖の折れた楊枝で齒をほせりながら、合點の安賣を爲て居る。

「本統に自烈體のね、此人はさ。お前さん、それちや私の出世するのを、心から嬉

しいと思つては居ないんでせう。」

「そりや、思はねえ事はねえさ。お前の出世は即ち俺の出世だからな……。」

「其廢ら、も少しはきくと物が言はれさうなもんぢやないか。」

「は、は、實は今些つとばかり考え事してたんぢやね。」

「何です、考へ事つて？」

「何ですつてお前、新さんの野郎が、俺に素敵な若えのを世話して呉れやうと云ふ話しが持ち上つて居るのよ。誰だつて少しは考えやうぢやねえか。」と、八十吉は、勿論厭がらせの了簡で。

「お巫山戯でないよ。」と、篠江は、荒々しくも、びしやりと音のするほど男の脊を

叩いて、

「それぢやお前さん、全然私と云ふ者を有るか無しに扱ふ氣なんだね。」

「有るか無しに扱ふ氣ぢやねえが、お前がいよ／＼子爵夫人とやらに成澄して了えば、此方は一生涯獨身者で暮さにならねえ理窟だ。俺あ百萬兩の金を貰つたらと云つて、お前と御前様とが、お馬車の合乗が何かで、乙う澄し込んで出入りする所を、指を咬へて見てる譯にやいくめえ。」

「だからその腹愈に、若いのを一人貰はうと云ふ了簡……………」

「了簡ぢやねえが、新さんが世話しやうと言ふからよ。」

「それぢや矢張、間が好きや貰はうと云ふ氣で居るんだね。」

「言つて見りや其廢もんかな。」

「新さんも新さんだね、私と云ふ者のあるのを萬更知らない人ぢやあるまいしさ。」

篠江は、稍面色を變へて、八十吉の顔を穴の明くほど睨み詰めたが、又暫時過ぎて

から、ぢり／＼と膝を進めて、

「ねお前さん、お酒の上の串戯ぢや本統に困るわ。御前様はね、本人の都合さへ好かつたら、今日にでも一緒に連れて來いと被仰つたんだからさ。」

「行くともよ。お前の方の都合せえ好けりや、今から直だつて關えや爲ねえ。」

「だつてお前さん、這麼に酔拂つて居ちや、仕様が有りや爲ないわ。」

「白髯くんだりまで行く間にや、川風で醒めツちやあな。」

「危いもんだわ。」と、篠江は、何氣なき體で、側らに押寄せてあつた切立ての衣類を取上げて見ながら、

「まあ、悉皆出來て來たんですね。兎も角も是を着て御覽な。」

「お屋敷へ出掛ると極りや、着換えて行くのよ。麩絲でも脱つといて呉んねえ。それ位の事は女房の義務……………」と、言ひかけて八十吉は、慌しく自分の頬に手を當て、

「ふ、ふ、ふ、女房なんて語は一切禁物の約束だつたツケ。」

「當然のことです。お屋敷へ行つてから、其座敷を迂濶に口走つたら、二人共即座にお拂ひ函だよ。」

「然うしたら又、舊の魚屋の八十哥兄よ。お前はお前で、もそつと立派な奉公口を目付けるまでの話だ。」

「莫迦な事お言ひなさい、彼の位女に甘い御前様を探さうと爲たつて、矢鱈に落ちてるもんですか。それにねお前さん、肝腎の奥様が不治の重病で、もう何方の道長い事は……。」と、篠江は、低聲に言ひつゝ、四邊を見廻し、

「何から何まで、本統にお訛へ向に出来てるんだから、お前さんさへ少し確乎してお呉れなら、何の造作もありや爲ないんぞよ。」

(二十七)

「いや、お前が篠江の兄か。遠慮する事は要らん。は、は、は、乃公が當家の主個ぢやよ。」

幸野原子爵は、奥底もない磊落な笑ひを以て、八十吉を自分の書齋に引見したのであつた。紹介者たる篠江は、冷々しながら八十吉の側に附添つて居た。

「お初にお目に蒐りまするで御座ります、私とその魚屋の八十吉と申す不束者でへい……妹の篠江が又、御前様には並々ならねえ御厄介を頂いて居りまするさうで……へい。這般は又、數ならねえ私までも……へい……。」

八十吉は、生れて初めて斯る權威の人の面前に引張り出されたので、只もう玉のやうな冷汗を額に漲らせて、應答の語さへしごろもごろであつた。篠江は、見かねたやうにそれを引取り、

「御前様、かねくも申上げます通り、禮儀作法などの事は、微塵も辨へのない人間で御座いますから、何卒その思召で、大目にお見赦しを願ひたく存じます。」と、

執成す。

「あつは、は、は、その懸念には及ばんちやよ。魚屋は魚屋、秦駝師は秦駝師の職分さへ知つとれば、それで充分ちやからの。」と、子爵は、炯々たる瞳に、八十吉の面を絶え間なく凝視て、

「兄妹とは言ふが、乃公が見た所では、一向に似たらんやうぢやの。」

「へい………似ては居りませんが、私と篠江とは生れた時からの兄妹に違え御座りませんので………へい。」

八十吉は、一旦引込みかけた冷汗が、更に眞夏の炎天にでも歩いて居るやうに出て来た。

「は、は、は、御前様のお目にも矢張然うお見えになりますで御座いませうか。眞個私ども兄妹の者は、何方へ参つても、異母兄だらうなんぞツて、斯様に申されませんで御座いますの。」

「うむ、然うぢやらう。何うも似た所が見出されんやうぢや。併し、言はれて見ると、額の生際の邊と、鼻筋の處が幾分似とるやうにもあるの。」

八十吉は、黙つて頭を垂げたなりであつた。腹の底では、御前様など云ふものは、顔付の伶俐らしい割合に甘えものだと思つた。

「そりや然うと篠江、今日からいよ／＼八十吉が當家に寝泊りを爲るなら、恰度幸ひ彼の忠七郎が居つた玄關脇の部屋が空いとるぢやらうから、古河にも然う言うての、當分彼處を八十吉の休息場と定めたが可からう。」

「はい………仰せでは御座いますが、忠七郎様のお部屋では、勿體ないやうに存せられますので………」

「なに勿體ない事があるものか。彼處が厭ならば彼の隣室か、何の道餘りに母宅と遠ざかるのは、萬事に都合好くあるまい、なう八十吉。」

「へい………私はもうお風呂場の片隅でも結構で御座います。」

「まあ、氣に入らん時は、又取換へるとして、忠七郎の部屋に極めどくが可らう。それからの、仕事と云うても差當りないやうぢやが、此間乃公が久し振で一才奥の病室へ行つて見たらば、四邊の樹木が餘りに繁り過ぎて、只さへも陰氣な病室が一倍陰氣になつとるやうぢやから、彼の邊の枝葉を少し透して貰ひたいんぢや。」

「へい………委細承知いたして御座りまするが、棄駝師の方は、永い間止めて居りましたので、御前様のお氣に召しますやうな仕事が出来ますれば、宜しう御座りまするが………へい。」

「なに、甚麽でも構ひやせんぢや。」と、子爵は、又今更のやうに八十吉のきりと引締つた面魂を見ながら、

「お前は、中々の好男子ぢやが、能うも今日まで獨身で居つたもんぢやの。」

「恐れ入りまして御座ります。」と、八十吉は、流石に氣味悪さうな眼元を外らして、

それとはなしに篠江の援兵を求めた。

(二十八)

「それには御前様、一個の因果じみたお話が御座いますので………」と、篠江は、一二寸膝を進めて、子爵と八十吉と兩方の面を目八分に見較べ、

「私どもの兩親は、元幕府の頃のお同心とやら申して、京橋の八丁堀に住んで居りました者ださうで御座いますが、代々家督に生れました者は、満三十歳にならぬ内に妻帯を致しますると、金比羅様のお罰が當つて天死をする云ふ言ひ傳へになつて居りますので………此八十吉も矢張三十の聲を聞きますまでは、誓つて妻は持たぬ事に致して居ります。」と、當意即妙。

「は、はあ、左様な變つた理窟が存在しての事なら、已むを得ん譯ぢやの。それにしても八十吉の年配で、獨身で魚屋を營むで居つたのは感心の至ぢや。」と、子爵

は、左も感心したらしく腮髯を撫で下して、

「併し、三十と云うても、もう三四年の辛抱ぢやらう。着實に乃公の屋敷で働いたつたら、乃公が又相應しいのを媒介して遣はすと爲やう。何でも人間は、誠意と着實とを忘れては相成らんぢや。」

「本統に左様で御座いますね。」と、篠江は側から合樋を打つたが、肝腎の八十吉には、誠意と着實の意味が薩張解せない。

「御前様、私に出来ます事なら、甚麽事でも一生懸命に致しますから、何卒妹同様に御引立てを願ひたい御座りますので御座ります。」

「は、は、は、一生懸命と云ふ事が人間唯一の守本尊ぢやからの。乃公は元來救ひ現代的の學問を喰嚙つた奴よりも、お前のやうな生一本の人間が大好きやよ。」と、子爵は、篠江の豫期した以上に、八十吉の人となり信じたいらしい。篠江は、此機逸す可らずとやうに、小腕へ擦をかけつゝ、

「それは兎に角と致して、もし御前様、私が餘計な事を申上ぐるやうでは御座います。奥様は何うあつても、病院へお入りになる事は御承知遊ばさないんで御座いますか。」

子爵は、突然妙な事をと言ひさうな失り聲で、

「……乃公は彼の以來、奥の病室へ行つた事もなければ、他の者の口から勧めさせた事もないぢやが、何かそれに就て和女等の耳へ聞き挟むだ事でもあるかの。」

「いえ、左様では御座いませんけれどもあの……。」と、篠江は、遽に怨みらしい眼を細めて、

「私、兄が参りまする早々、斯様な愚痴がましい事を申上ぐる次第では御座いませんが、何う云ふものか致して、奥様はあの……私ばかりを仇敵のやうにお憎み遊ばし、今にも取殺すやうなことをお口へお出しになりますさうで……私のやうな氣の狭いものは、なんだかもう薄氣味がわるくて、お屋敷に斯うして居りま

するのさへ、斷續なしに背後から、物の怨靈でも取付いて来るかのやうに思はれてなりませんので御座います。成らう事なら、奥様が病院へでもお入り遊ばしたら、少しは然うした惱みも薄らうかかと存じますので、それで一寸お訊ねを申上げましたので御座います。」と、故意ならず胸を押へて萎れる。

「あッは、は、は何事を言ひ出すかと思へば、其處和女は下らん事を……。」と、子爵は例の豪傑笑ひで笑ひ倒さうと爲たが、篠江の悄然たる容が、怎麼にもいたいけさうに見られたので、又一寸機嫌を取直すやうな調子で、

「和女が強ての望みとあれば、強引にでも病院へ送り込むで了ふのは容易い話ぢや。が、併し、和女自身の邪推も大分に手傳つとりはせんかの。」

(二十九)

篠江は、その理智に富むる眼元に、尾花が露の風に滾れさうな惱みを含むで、

「致しますと御前様、何も彼も私の邪推からだど、仰せ遊ばすんで御座いますか。」
「いや、全然然うぢやとは言はんが、兎角女には邪推と云ふものが附物のやうぢやからの。なう八十吉。」

子爵は、敢へて意に介せざるもの、如く言つて、語の鋒先を八十吉に轉じた。

「へい……御前様の仰せ遊ばします通で……。」と、八十吉は、揉手ながらの御意御道理であつた。と、篠江は、稍や暫時口を噤むで、口惜しさうに眼を閉ぢたが、

「……御前様、邪推は女の附物とやら仰せ遊ばして、御座いますが、奥様のお心掛だどて、餘りにお酷う御座いますわ。私から何一ツ奥様に對して、反抗がましい事など致した覺えも御座いませぬのに、私ばかりを全然前生からの仇敵のやうにお憎み遊ばさなかつたツて宜しいでは御座いせんか。尤もそれには……彼の小壽美さんと云ふお方が、奥様のお側に附蚤つて居て、有る事無い事、火を補し

油を注いで焚き付けてお在のせいもあるでせうが、それに致したって、餘りと申せば餘りと申すもので御座います。」

「なに、小壽美の奴が有る事無い事算へ立つては奥に焚き付けること……？ は、は、は、篠江、そりや不可わ。彼の小壽美と云ふ奴は、和女の想ふとるやうな其腹の超えた人間ぢやありやせんから、安心して居れ。」

小壽美の事と云ふと、子爵は屹度判で捺したやうに辯護の位地に立つのであつたが、篠江には又、それが甚だ嫉しくもあり、小癩にも觸つた。元來彼の忠七郎と小壽美との一件を捏造して、子爵の殿に讒言を逞うした篠江の眞意はと言ふと、一に唯自個の競争者たる小壽美を死地に陥れやうと云ふ苦肉の一策であつたので、忠七郎其者に對しては、その實別個の目的を有して居たのであつた。然るに、目算は向ふから外れて、子爵が片手落の裁判の結果、忠七郎のみ放逐せられて、小壽美は依然として……假ひそれが自分と勢力の消長を争ふはごではなくとも……何等の變化な

しに子爵の寵愛物として踏み止まつて居るのが、慥にも忌々しくてならない。單に忌々しいばかりでなく、何かに付けて病褥に在る奥様以上に邪魔物の感じが爲てならない。其處で、事に託けては、小壽美の缺點をほせくり出さう／＼に掛つて居た。そして、一日も早く彼女を屋敷の外へ投げ出して丁はぬ内は、何うしても安堵の枕に夢を結ぶ事が出来得ないのであつた。

「まあ御前様には、小壽美さんのお話とさへなれば、私の申す事は、一も二もなく揉消してお了ひ遊ばすんで御座いますもの。私、宜しう御座いますわ。何にも申

上げますまい。今後は何卒小壽美さんをお側へお呼び遊ばして下さい。」
手強く拗ねて、彼方へ顔を反向けた。八十吉は、何だか妙な所へ板挟みの境遇となつたが、迂濶に下手な差出口もならぬので、石のやうに硬く坐つて、時々濟まぬやうな眼付に、子爵の御顔色を覗ふのみであつた。子爵は、詮事なしに、
「は、は、は、は、兄と云ふ後楯が見えたので、和女は急に強くなり居つたの。ま

「ま、好いわ。外ならん和女の言ふことぢやから、何も彼も嘘はないものと極めどか
ら。」

到頭子爵の方から降参の白旗を掲げた。

(三十)

「い、え、私は存じません。お屋敷内に居つて、現在彼のやうな不義を働いた小壽
美さんでさへ、彼あして黙つて打捨つてお置き遊ばすんで御座いますもの……
……。」と、篠江は、セツ付くやうに鼻聲を詰らせ、

「私ももう是からは、勝手な我儘を致しますから、御承知遊ばして下さい。」

「宜いども、そりや和女の勝手ぢや。併しぢや、篠江、何の彼の言うて見た所で、
和女は近い内に……。」と、子爵は、遙に喜久子夫人の病室の在る方へ眼を呉れ、
言外に意味ある微笑を浮べて、

「なう、八十吉、お前が恰度好い立會人ぢや。和女の妹ぢやあるが、折々見當違ひ
な駄々を捏ねをつて、乃公を困らすするには、平叩ぢやよ。」

「いやもう、同じ兄妹では御座りますが、稚い時分から我儘一杯に育ちました癖
が、まだ残つて居るものと見えまするで……。」へい。」

「お前から能く言つて聞かして呉れるが宜い。」

「へい……。」委細承知致しまして御座りまする。」と、八十吉は、痺れの切れた兩
脚をもじく爲ながら坐り直つた。子爵は、敏くもそれと察して、

「いや、愚にも付かん長話で、お前も嘸窮屈ぢやつたらう。こりや、篠江、自分勝
手ばかり言ふとらんで、八十吉の部屋へ案内でも爲て遣らんか。」

「難有う存じまする。出来まする事ならば何卒然う云ふ事に……。」と、八十吉は、
思はず肩の重荷を投げ出したやうな氣が爲た。

けれども、篠江は尙拗ねたままの、何處やらに膨れ返つた調子で、

「それでは阿兄さん、私が御案内を爲て進めます。」と、不精々々に座を起つ。かねて、謀し合してあるのには違ひないが、八十吉は、篠江から突然「阿兄さん」と呼ばれたので、妙からず面喰ひの氣味であつたが、其處を特質の無作法なお辭儀に瞞しおほせて、えいやつと御前の前を退出に及んだ。

寝るも起きるも、六疊一室の裏借家と違つて、八十吉は、何から何まで井の中の鮎が大沼へ浮び出たやうな氣持であつたが、然う矢鱈に驚きづくめで居るのも氣の利かの限りと、落着かぬ膽玉を無理に落着け、篠江が案内する儘に跟き従つて行くと、薄暗いお廊下の曲り角の所で、はしなくも一個の高島田に出會つた。八十吉は、眼敏にそれを認めて、「滅法にはくい白物が………」と、心に思ひながら、その何者であるかを篠江に聞かうとすると、篠江の方から隙さず耳元へ口を差寄せ、

「お前さん、彼女が小壽美つて云ふお人善なんだよ。」と、囁く。

「彼女がか………」と、八十吉は、進みかけた足を踏み止め、

「お人善だかお人悪だか知らねえが、何にしる素敵だ。」

「厭だね、此人はさ。彼の人にはね、忠様と云ふ立派な戀人があるんだから、お前さんなんか逆さに立つたつて及びも付きや爲ませんよ。」

「おやッ、いやに氣を廻しやがるぢやねえか。誰が彼の娘を口説うと言つたえ。」

「腕があつたら口説て見るも可いさ。」

「莫迦な事吐すねえ。」

八十吉は、今まで神妙に神妙を盡した反動でもあらうが、忽ち本性の魚屋に復つた。篠江の先導で、玄關脇の一室へ連込まるゝや否、胡坐を掻いて時と一息。手拭を出して、頻と頸元の汗を拭きつゝ、

「お篠、手前は何時の間に彼あした肚胸骨になつたんでえ。」

「莫迦にお爲なさんなよ。私が肚胸骨のあるんぢやなくて、對手が大甘に出来上つてるんさ。」と、篠江は眼中に敵を認めぬ微笑。

(三十一)

牡丹は地に委し、藤は水に落ち盡して、若葉の向島は、青葉の向島と變つた。相馬の古御所とさへ緯名せらるゝ、幸野原家の藪屋敷は、全然青葉と藪苔の底に埋もれて了つた。此奥に家あり、家の中に人ありと云ふ立札でもなければ、一度二度尋ねて来た人間には、薄氣味がわるくて迂濶と門内へは踏み込まれぬほどの陰氣さであつた。水鶏、杜鵑、雨蛙の鳴く聲、とり／＼に面白しとは云へ、じめ／＼と濕つた樹蔭の庭先、到る處に蚊柱の群れ立つて居るには、慄悍なる酒屋の御用さへ怖氣を震つて眼を圓くして居た。蝸牛、蛞蝓、毛虫の嫌ひな者には、到底子爵家の勝手口へは立寄る事も出来得ぬ位。けれども、是は必ずしも、子爵家の貧乏なためではない、一ツは邸内の餘りに廣過ぎるのと、子爵その人の性癖として、「何でも物の自然を愛する」と云ふのが、最も有力なる放擲かしの原因となつて居るので、草も木も延び

放題に延び茂つて了ふのが常であつた。成程自然には違ひないが、斯うなつては、風致も雅味もあつたものではなかつた。別して、喜久子夫人の居間——今ではその病室と變つた奥座敷の縁端が、恰度見透しの築山の邊にかけては、一樣に只立樹と青草の藪であつたが、其築山の眞裏に當つた極めて淋しい所に、何時の世、如何なる必要から穿たれたものか知らぬが、一寸手が觸つても藪苔の滑りが、べたりと附着くほど時代の衣を被た一個の古井筒がある。邸内では是を「不汲の井」と名けて、誰一人側へ寄つて、底の深さを測つた者もない。或年豪腕師の一人が試みに石を拾つて投げ込んで見たらば、中から白い一抱へばかりの煙の柱が濛々と立ち昇つて、底の方になんとも云へぬ雷の如き迂鳴が聞えたこの事。但し、それとても、確かに邸内の人が見た譯ではないので、只豪腕師の話として傳はつて居るまでの事であつた。不汲の井！名を聞いたゞけでも、何かの怪談噺が出て來さうであるのに、此古井

戸の周邊と来ては、百年二百年を経過したらしい檜の木が、幾本もなく八重十文字に枝をさし交して、晝も鼻を摘まれさうな木下間を作つて、名もなき雑草やら、自然任せの蕪蘿がぐるりを巻いたやうに搦み付いて居るので、時適ま築山の上までは昇る者があつても、裏手の此處へ降りて来て、五分と立ち止り得る者は決して無かつた。現に此古井戸の底には、水が有るのか無いのかさへ、知つた者は一人もないと云つて宜い位であつた。

只喜久子夫人などが、何うかした時、子供達の腕白を戒むるのに、

「柔順になさらないと、不汲の井へ連れて行きますよ。」と、言つて嚇しをかけた事はあつたが、その喜久子夫人と雖も、曾て一度も不汲の井の在る方へ眼を向けた事さへなかつた。

魚屋から裏駝師に豹變して、子爵家の常備人と成澄した八十吉は、今日しも殿のお指揮に依て、脚達楳子と植木鉄を命に、喜久子夫人の病室に近い庭木の菊込に手を

着け始めたのであるが、仕事の合間々々には、邸内諸所を歩き廻つて、其方此方の案内を覚えやうとする内、不圖築山の裏手へ降つて、不汲の井の木下間へ出て来た。腰にも及びさうな叢の中から、花崗石の古井筒が四分通り頭を出して居るので、何の氣なしに草を掻き分けて進み寄つたが、風もないのに遽に身體中がぞく／＼と爲て来たので、自分ながら變だと思ひながら、ひよいと顔を擡げて頭の上を見ると驚いた。小腕の太さほどもあり、な灰色の大蛇が、星のやうな眼を光らして、檜の木の小枝からだらりと眞逆さまにぶら下つて居た。

(三十二)

「やッ、主が居やつた。」

八十吉は、蒼くなつて元の仕事の場所へ逃げ戻つた。又と復び後を振り返るの勇氣がなかつた。ほんの一目！それが大蛇の形である事を認め得たまでの刹那の感觸であ

つたにも拘はらず、彼の眼には、尙判然と自分を睨み詰めたやうな凄く恐ろしい大蛇の眼が、深き戦慄を残した。さらさらと築山裏の木の葉が風に戦々音を聞いても、今の大蛇が鎌首を擡げて、自分の跡を追かけて来るやうな気が爲た。

「何となく氣分のわるい日だ。」

ちやきくの江戸ッ兒、一匹二匹の蛇位に怖氣を震ふやうなこつて、此大屋敷の藁駝師になれるものかと、自分で自分を勵ましても見だが、何分にも缺が言ふ事を肯かない。八十吉は、到頭好い加減に仕事を切上げて、自分の部屋へ歸らうとする。珍しくも喜久子夫人の病室の障子が、中からするくつと開いた。八十吉は、何の氣なしに瞳を病室の内に注いだ。氣候の蒸し暑い故でもあらうか、聞き及んだ重病の奥様は、薄暗い窓際の所に、床の方を枕にして、白い毛布を胸に掩つたま、仰向けに手を合して、骨と皮ばかりの身體を半ば起き直つて居られた。八十吉は、遠目ながらも奥様の病軀を瞥見したのは、今日初めてであつた。側には高島田の小毒

美が、ちやんと看護の任務を盡して居る。

「思つたよりは、重體の御容子らしい。」

八十吉は心窩かに斯う思ひながら、止せば好かつたものを、延び上るやうにして、怖々ながら遙に奥様の顔を覗いた。奥様は苦しうに齒を喰締つて、落凹んだ眼を睜つて居られた。

八十吉は、悸乎として小首を縮めた。勿論氣の迷ひではあらうが、奥様の面色と云ひその眼光、正に確かに先刻方不汲の井の木下闇で出逢つた灰色の大蛇と些とも違はぬ。彼の大蛇の生靈が、早くも奥様の身體に乗移つて居たのではあるまいか知ら

.....

八十吉は、殆ど生きたる空はなかつた。

「.....其處筈があるもんか。俺が何も奥様からお怨みを受けるなんて、其處事のあらう筈がねえ。」

思ひ返しては見るもの、矢張怖くてならない。一體此八十吉と云ふ男は、篠江の情夫でこそあるが、篠江に比べると、鼻ツ端ばかり強らしく見えても、心は割合に小膽な方であつた。けれど、男前は確かに百人の中に二人とは見出せないほどの、きり、とした厭味氣のない、男らしい男だ。是に依つて見ても、篠江の人形喰たる事が判るのである。

八十吉は何とも言へぬ厭な〜氣分になつて、そこ〜に玄關脇の部屋へ歸るや否、押入から夜具を引張り出して、頭からすつぱり被つて寝て了つた。自分ながらそれが、一日の中の何時頃であつたかをも知らない。無理に眼を瞑つて、一眠り爲て見やうと試みたが……灰色の大蛇と奥様の病苦の顔とが、同じ様に眼様に浮むで、頸首からざざあーツと水を注ぎ込まれるやうな思ひだ。手を動かして、自分の肌を擦つて見ると、身體中は宛然皴の脊のやう。加之に氷で漬けたやうに冷たい。

(三十三)

八十吉は、一生懸命夜具の底で、金刀比羅大権現の御名を唱へ始めた。そして出来る丈の智慧を絞つて、灰色の大蛇と奥様の病苦の顔を忘れやう〜に努むるのであつたが、何うしても忘れる事が出来ない。

『もし阿兄さん……一寸お前さん。』
夜具を引剝くるやうにして、揺り起す者があるので、八十吉は、稍人心地付いてばかり眼を睜くと、篠江が何時の間にか枕頭に来て居た。

『おツ、お篠か、好いところへ来て呉れた。』と、八十吉は、救助船の舷へ取絶つたやうな喜び。

『何ですなえ、阿兄さん、誰が何處に聞いて居まいものでもないのに、お篠お篠ツて呼び捨てに爲る奴があるもんですか。』

篠江は、窘むるやうに言つて、八十吉の尋常ならぬ顔色を覗いた。

「そ、そ、それどころぢやねえんだ。俺が大變な事になつちやつたんでえ。」

「大變な事つて、風邪でもお引きのかえ。眼の中まで濕むでるやうですね。」

「風邪ぢやねえ蛇なんだ……蛇の眼球と、そ、そ、それから……奥様の眼球なんだ。」と、八十吉は齒の根が合はない。

「譯が分らないねえ薩張。蛇の眼球と奥様の眼球が何うしたツて言ふんです。」

「その眼球と眼球なんだ、お篠……俺あ勝手を言ふやうだが、矢張待乳山下の裏店へ引退つて、天秤棒の稼ぎが爲て居てえ。」

「お前さん、變な事ばかり言つてお在だが、まあ話の根源を説明して御覽よ。」

篠江も、幾干かは氣懸りになつて來たので、其處へ坐つた。

「説明も、へつたくれもあるもんぢやねえんだ。眼球と眼球が同一に見えてならねえツて事よ。」

「ほ、ほ、ほ、お前さんの眼球の方が、餘程變手古だわ。詰らない夢でもお見なんでせう。」

「夢ぢやねえ〜。」と、八十吉は、矢鱈に頭を掉つたが、流石に原因を明さすに理由の分らう筈はないと、氣付いたので、初めて少し精神を落着けて、不汲の井の大蛇の事から、喜久子夫人の病室を覗いた一伍一什を簡短に語つた。そして、その後、

「當家の奥様は、生がら蛇に成て御座るに違えねえ。」と、附加へた。附加へたのではない、八十吉は、爾か信じたのであつた。

「まあ、呆れた。それ丈のお話……？」と、聞き了つた篠江は、天井を嘯きながら嘲笑つて、

「お前さん、それでも明治の時代に生れた人間なの。串戯も休み〜言ふもんです。纏しんば、奥様のお身體に蛇の生靈が乗移つて居たにしてが、それが何で恐

ろしいの。其處こつて能くお前さんは、今日まで生きた魚を商賣物に扱つて居れたわね。まあ積つても御覽なさいよ、只の口稼ぎや、僅かばかりのお手當を頂くために、お前さんだつて永年の商賣を止めて、當家へ化け込んだ譯ぢやないでせう。其處下らない活動寫眞の怪談見たよな話に恟々して、當家に居るのが厭だの應だのごお言ひのやうな了簡では、本統に是から先が思ひ遣られるわね。』

『それだつてお前、怖え物は誰でも怖からうぢやねえか。』

『其處がお前さん、男の我慢と云ふもんだわ。海士が海底の寶を取るにだつて、二ツなき命を捨て、懸るんだつて言ふ位ぢやないか。彼の大病人の奥様が今夜にでも……………』

『さ、篠江は、背後を願つて、暫時語を途切らせたが、』

『……………お互ひに先の安樂を考へたら、蛇の眼球位の事に兎や角言つちや居られないでせう。』

(三十四)

『筧棒め、俺だつて其處の理窟は、疾の昔から分つてるんだ。』

『分つてるなら言ふ事はないわ。何です、其處蛇なんか二度と再び出て來たらば、棒でもつて打殺して了ふが可いぢやないの?』

『蛇の方は打殺す事も出来るが……………奥様の眼球は、ゴツ、何うなるんでえ。』

八十吉は、斯う云ふ間も、折々妙な眼付をして、極聲でも起した人のやうに顔を擧めた。

『奥様の眼球は何うなるつて、そりやお前さん、奥様がお死去れにならない限りは、何うもなりや爲ないさ。けれどもね、お前さん、今でこそ御病氣のために、彼様に落凹んで怖らしく成てお在だけども、平生の奥様は極々柔和な品のあるお眼なんですよ。』

「だからよ、確かに蛇の霊が乗移つて居るに違えねえんだ。お篠、わるい事は言はねえから、お前も反逆心は止めに爲なせえ。」

八十吉は、是はごに膏を取られても、まだ眼球の事ばかり言ひつけて居る。

「ちよッ。」と、篠江は、齒痒さうに舌を鳴らして、

「私や、是が爲めに一旦はお前さんと手を切るまでも、思ひ立つた大願だから、後へは退きません。假りに奥様の御病氣が、三年五年と長延いた處で、私と御前様との間には、ちやんと立派な契約が取結むであるんですからね。」

八十吉は、黙つて篠江の言ふが儘に言はして置いたが、

「お篠、一寸待ちねえ。」

もう篠江さんと呼ぶ事も何も忘れて、手と口とで一緒に遮り、

「ちや何か、お前は俺と手を切つても關はねえと言ふんだな。」と、改まつた彼の眼は、鋭き一種の光を飛ばした。

「望みはしないが、お前さんが餘り氣の小さい事ばかり言つてるからさ。」

「何だぞ?」

八十吉は、片膝を立て直した。

「お前さん、憤つたの? 憤る分には幾千憤つたつて關はないけども、場所柄を辨へて呉れなくちや困りますよ。幸ひ今日は御前様はお留守だから好いやうなもの、古河さんも居りや、他の召使ども、澤山に居るんですからね。」

「喧しいやい。」

「ほ、ほ、ほ、お前さん、私の阿兄さんと云ふ事忘れや爲ないの。阿兄さんは阿兄さんらしく、もそつと静かに物を被仰い。併し、それ丈の元氣がお有なら、蛇の眼球位は干鱈の眼ほごにも怖くはなかりさうなもんだにね。」

篠江は、膽力以上口も達者な女であつた。

「蒼蠅えつてこと、俺と手を切るなら、立派に切ると言つて見ねえ。」

「繰返すまでもない事さ。お前さんの方から、怖くて居られないと言ふから、仕方がないぢやないか。何でも好いからも少し聲を低くお爲なさい。」

「何言つてやがるんでえ。察する所手前は慾に眼が眩むで、俺を袖に爲る氣なんだらう。」

「まあ無理な事はつかし、袖に爲る者を何だつて商賣までも止めさして、當家へ引張り込むもんですかね。」

「ぢや何だつて、手を切るなんぞつて吐しやがるんでえ。」

「吐しやがりや爲ません。お前さんの方から待乳山の下へ歸ると言ふからさ。幾歳になつても没分曉漢はお前さんの持前なんだね。」

「當然よ。這麼化物屋敷に人間たるべき者が、靜乎として居られるか居られねえか、考えて見ろえ。」

篠江が「手を切る」と口を交らした語が、八十吉の疳癩玉には、餘程手酷く響いた

のであつた。

(三十五)

「うふ、ふ、ふ。」と、篠江は、ほき出すやうに笑つて、

「化物屋敷かは知らないけども、私を始め、澤山の人達が悉皆斯うして無事に勤めて居られるのが不思議ですね。」

「然う云ふ手前達も悉皆化物の同類なんだ。俺のやうな江戸ッ兒にや、三日たあ居られねえ。」

「勝手にお爲なさい。」と、篠江も、少々持餘しの氣味であつたが、語は寧ろ前よりも温和に、

「何の彼と言ふやうなもの、お前さん、今夜一晩丈、能うく精神を落着けて考へて見て下さいよ。」

「無駄なこつた。奥様の眼球が彼處の奥の室に光つてる間は……。」
 「真個それほどに奥様のお眼が怖かつたのか知ら……。」
 八十吉の語に引込まれるではないが、茲に及んで、篠江も流石に一片の疑心を起さずには居られなくなつた。彼女は、今更のやうに下唇を噛むで、熟と一思案。
 ぱつと夕方の電氣が點つた。八十吉は、嬰兒のおびえたやうに悸乎として、四邊を振り返つた。

「お歸り……。と、耳馴れた車夫の叫びが聞えたので、篠江は、慌しくも立ち上つた。

「好いかえ、お前さん、本統に能く落着いて考へて下さいよ。」

斯う言ひ捨て、襖を開けて出て了つた。一頻り、その邊りが人の覺音で、賑しかつたが、それも程なく鎮り返つた。

八十吉は、兀然として思ひに耽つた。相變らず、大蛇の眼球と奥様の病苦の眼球と

は、同一になつて彼の眼の前へ浮むだ。何だか頭の上の電球までが、それに似て来たやうな氣が爲た。八十吉は、獨坐に堪へられなくなつて、竟に玄關脇の部屋を飛び出た。そして、思慮もなくふら／＼と向島の堤へ出て來た。堤の黄昏は暗い。櫻の青葉を撫で、行く川風は、幾分か沸き返つた八十吉の頭を冷して呉れた。

「もしッ……一寸。」

突然に背後から呼び止めた人があつた。

「へッ、俺ですかね。」

八十吉は、驚いて振向ながら答へた。その人は、袴を穿いた壯い書生體。

「若しや違ひましたらお詫を爲しますが、貴方は今幸野原家の屋敷から出てお在たんですね。」

「然うで御座えます。俺は幸野原の化物屋敷から……。」

「多分然うらしくお見受したので、お尋ねして見たんですが、子爵夫人の御病氣は

其後如何で御座いませう。」

八十吉は、漸々の思ひで、喜久子夫人の眼を忘れかけて居た所へ、又しても「夫人の御病氣は……」と、出られたので、覺えず手足の縮むやうな氣が爲た。

「奥様の御病氣ですかえ、日に増しおわるくなるばかりですよ。」

「日に増し……。」と、書生體は、失望の歎聲を漏らして、

「それでも豈夫今日明日と云ふほどの事はないでせう。」

「何とも知れやせんね。」

八十吉は、半分逃足を使ひながら、義理一遍の挨拶。

「で、何でせうか、看護の事などは、相應に行届いて居るでせうか。」

問ひやうが諄いばかりでなく、何だか普通人の語態と異つて居るので、八十吉も少しく變手古に思つた。

「俺あまだ彼のお屋敷には、新参者ですから、委しいこたあ知りやせんがね、何で

も奥様は、病院に入るのは厭だ〜と被仰るんださうで、今の所ぢや、小善美とか云ふ年の若えのが一人附きつきりで看病してますよ。」

「は、あ、小善美が……。」と、書生體は、何が心に合點の行つたやうな顔付。

「失禮だが、お前さんは一體誰方ですね。」

「僕ですか。僕はつい先頃まで幸野原の屋敷に世話に成て居た者です。」

此一語に由て、八十吉は大概是が篠江から聞いた子爵の甥の賤機忠七郎であらうと察した。然う氣が付いて見ると、何處か高尚い所のある活潑で然うして伶俐さうな人品骨格……。姓は争はれねえものだと思つた。

(三三六)

「成程然うですかえ。それぢやお前さんは忠機つてえ人なんですな。」

「然うです。公然歩を子爵家へ踏み込む譯にはゆかん事情になつてゐるので、他所な

がらお尋ねを爲たんです。何うでせう、君から一ツ、夫人に僕の此處まで来た事を傳言して頂く事は出来んでせうか。そして、出来得る事なら、幸ひ夜にもなつとる事ですから、夫人の病室まで内所で、僕を案内して頂きたいんですが……。」

八十吉は、途方もねえ事を言ふ男だと思つた。夫人と云ふ語を聞いてさへ、直に彼の灰色の大蛇の眼球が眼の先へ浮むで来るのに、何うして、夫人の病室へ傳言などを齎して行く事が出来やう。

「折角だが不可ませんや。」

「何故でせう。」と、忠七郎は、手に持て居た鳥打帽子を揉苦茶に爲ながら。

「何故でせうって、そりや不可ませんや。俺や奥様の側へ行く事の出来ねえ身分ですからね。」

「だから、秘密にお願ひするんです。人間一匹助けると思つて、何とか其處を取計つて頂きたいんですが……。」

「何うあつても不可ませんや。他の事なら大抵の事は肯いて進げますが……その一件ばかりは。」

忠七郎は、弱りきつて溜息を吐いた。

「それちや、貴方のお手を假らずに、何とかして叔母の病牀まで行く工夫はないでせうか。」

八十吉も、持餘して考へ込んだか、

「工夫と云つちやありませんがね、よくせき仕方がなきや、築山の裏の築地の破壊目からでも潜り込むですね。随分氣味のわるい草茫々の所ちやありやすがね。」

忠七郎は、成程と掌を拍つた。

「いや、其處までは氣が付かんでしたよ。被仰られて見ると、不汲の井の側の築地に、一昨年の洪水以來壊れた儘の大穴が一箇所ありましたやうです。いや、お蔭で叔母の見舞が出来るです。難有う御座いました。」

雀躍りせぬばかりに喜び勇むで行きかゝるを、今度は反對に八十吉の方から呼び止めた。

「もしッ、築地の破壊目は好うござすが、大蛇が居るから氣をお附けなせえましょ。」

「は、は、は、蛇なんか甚麼大きな奴が居たつて驚きや爲ません。」

忠七郎は、些の躊躇なしに、子爵家の裏手へ廻るべく、白髯の社頭を横ぎつて、彼方へ急いだ。影は忽ち夕闇に没した。

茫然と地蔵の如く堤の上へ立ち残つた八十吉、少時は勿論何方へ爪先を向けやうとの考へすら無かつたのであるが、不圖近所の牧場で、乳牛の糞を慕ふ啼聲が耳に入つたので、初めて我に返つた。

川面はもう墨で染めた真綿のやうな霧が立ち罩めて、氣が付いてから見直すやうな新月の細い光が、葉櫻の梢に懸つた。

「忘ましい、吉原へでも行つたら、些は憂晴しになるだらう。」

八十吉は、何處までも八十吉丈の智慧であつた。彼は例の眼球の恐しさを忘るゝ手段として、吉原へ行つて見やうと云ふのである。彼は待乳山の所帯を疊むで、子爵家へ奉公住してから、今日で恰度五日目であつたが、即ちその五日振で、竹屋の渡船を此方側へ渡つた。と、不思議な事には、拭き去つたやうに氣分が一轉して、忘れたではないが、例の眼球の事などは、全然怖くも恐しくも何とも無くなつて了つた。今まで妙に恐しかつた自分が、自分ながら可笑くもあり莫迦々々しくもなつて、獨りでくすくす笑ひながら歩いた。

(三十七)

「もう……もう私は、何にも言ひますまい。くよくよ思ふだけ……病の種を殖すやうなものです。」

先達て子爵が篠江と一緒に、珍しくも此病室を見舞はれてから、日数はまだ幾干も経

て居ないのであるが、喜久子夫人の瘦さらばえた相貌は、より一層衰弱の極に達した。そして、消えかゝつた灯のそのやうに、力の竭きた聲音で、或事を言ひ出でんと爲る度毎、咽喉を裂くやうな咳の苦しさを烈しき。小壽美の手からは、殆ど嗽茶碗の離るゝ暇がなかつた。

「奥様、左様に御悲觀遊ばすものでは御座いません。世の中には、天道様もお在遊ばせば、神佛もお在遊ばします。お心を丈夫にお持ち遊ばして下さい。」

小壽美は、靜かに喜久子夫人の脊を撫で下しながら、慰めの語を添ふるのであつたが、實は到底恢復の見込なきものと知つてた。

夫人は、只首肯くやうに頷を動かし、何處を凝視するでもなく、其の邊りを凝視めて、

「小壽美……彼方の方で雛子の泣聲が爲るやうですね。」

「おや、左様で御座いますか知ら……。」と、小壽美は、遽に聞き耳を敏てたが、

別段それらしき聲も聞えぬ。

「奥様、私には毫しも……。」

「いえ、確かに聞えます。彼れ、彼の通り火の付いたやうな聲で泣き叫んで……」

居るではありませんか。小壽美、氣の毒ながら和女、彼方へ行つて、雛子を此處へ連れて来て……彼れ彼の通り……屹度又篠江奴が、面倒臭がつて苛め散ら

して居るのに違ひありません。」

夫人は、延び上るやうにして、糸の如き兩手を枕に突張り、落凹んだ眼を無理に睜つて、何かは知らず、空間に逍遙つて居る或物を掴み取らうとする氣色さへ見られた。要するに、夫人は遷の熱に襲はれて、心氣激しく興奮を來したのである。

「奥様……お氣の所爲で御座います。お嬢さまは只つた今まで、杉やがお抱き申して、大層御機嫌でお在遊ばしたので御座いますから、必ず左様な事のあらう筈は御座いません。」

「いゝえ、和女までが……。」と、夫人は睨め付くるやうに小壽美の語を遮り、
 「現在……彼の通り、手に取るやうに聞えて居るのがお前の耳へ入りませんか。
 私は生きて居て、此苦痛を受けるなら、寧ろその事難子を抱いて……不汲の井へで
 も飛んだ方が優しです。」と、白い齒を啣ひ締つた。

「まッ、飛んでもない事を……。」と、小壽美は、もう兩眼に涙を浮べて、

「左様な事を被仰いますと、尙更お嬢様をお連れ申す事は出来かねます。まあ、
 暫時の間お鎮りになつて、お熱をお計り遊ばしたら如何で御座います。」

夫人は、油氣も失せて、蓬の如く亂れた黒髪を激しく左右に掉りつゝ、而も極端な
 鋭き調子で、

「小壽美、今日までは和女一人を日本國中唯一人の親切な味方と思つて、私は心か
 ら手を合して居ましたけれども、今日と云ふ今日、今日と云ふ今からは、和女も矢
 張私の敵です。考へて見れば、和女も同じく私の御前様を寝取つた女ですもの。」

只つた四五分前までは、死人の如く蒼白であつた夫人の面が、見る／＼葡萄酒を注
 いだやうに變つた。唇は戦き、眦は逆釣つて、その一言一句毎に、眼の中から血の
 如き光が進る。それが而も、舊式の臺洋燈の灯影に反射するので、何とも言へぬ物
 凄さであつた。小壽美は、大切の奥様たる事を忘れて、我知らずきやツと叫むだ。
 「……敵です。和女も正しく私の敵です。一日も早く私の死ぬのを待ち構へて居
 るのは、御前様と篠江ばかりと思つたら、和女も矢張りその一人です。」と、夫人
 は、何を穿き違へたかして、執念くも追詰めるやうに熱罵をつけた。
 小壽美は、只がた／＼と胸震ひしながら、顔を掩つて、呼吸を殺して、斯る時に、
 何人かゝ來て呉れたら……と心に祈つた。

病夫人の眼は、益光つた。

「小毒美、嘘なら嘘とお言ひなさい。和女も屹度御前様の内命を受けて、私の命が一刻も早く消え失せて行くのを、祈つて居るに違ひないんでせう。」

「あれまの、思ひがけない事ばつかし……奥様……奥様……そりや貴方様のお邪推と申すもので……。」

小毒美は、堪らなくなつて、泣きながら前へ雙つた。

「いえ、邪推ちやありません。私にはちやんと分つてゐるんです。」

夫人は、斯う言ひながら、手を差延べて小毒美の袖を引寄せやうと爲たが、僅か四五寸の所で手が届かぬと、自劣體さうに亂れた黒髪を節高い指先に掻き撈つて、口惜しげにきり／＼と糸切齒を鳴らした。宛然強度のヒステリーに惱された女のやうであつた。小毒美は、幼い時自分の母親も矢張、此様な激烈なヒステリー症に罹つて、父や自分等を困らせた昔を懐ひ起さずには居られなかつた。恐しさと悲さと果敢なさと淺猿しさが、一時に胸に迫つて、肩糸の如くこん縮かつて了つた。

「……奥様……それはお邪推で御座います。お嬢さまをお伴れ致しませんのは、

お醫者様から堅いお差止めがありますからの事で……。」

「いゝえ、其座事聞く耳は持ちません。」と、夫人は、眼を空に付けて、又少時欄間の邊を睨み詰めたが、突然吹つ切つたやうな……但し力なき聲を額はせ、

「おッ、雛子や、お前其處にお在か……阿母様はもう近い中に死んで了ふんですよ。」

欄間の中程には、恰度最愛の雛子嬢を夫人が抱いて、子爵の殿が長子三郎君の手を把りつゝ、一家水入すの睦じき團樂の光景を撮影した白金式の大寫眞が、立派な金縁の額に收めて、掲げられてあつた。

「……近い中に死んで了ふんですよ。阿母様が死んだ跡では、お前の爲めに誰一人力となつて呉れる者はありませんから、お前はお前丈の覺悟を極めねばなりませんよ。宜いかえ、お分りだらうね」

朦朧たる洋燈の灯影は暗いが、寫眞の中に居る雛子嬢は、莞爾かな花の如き笑ひを浮べて、母夫人の乳房の邊りをまさぐつて居た。

「宜いかえ、お分りだらう。阿母様は近い中に死んで了ふんですよ。仇の召使ひ輩に毒害でも爲れないやうに氣を付けてお呉れよ。しッ、篠江は大の仇ですよ。此處に居る小壽美も仇の一人ですよ。宜いかえ、屹度お分り……………」

同じ事を繰返して居る中、忽ちにして又、苦しき咳が込み上げて來た。がッと云ふ咳拂ひと共に、動いやうな血の塊が二合餘りも口を衝いて迸り流れた。

それと氣付いて、小壽美は、慌しくも嗽茶碗を持添へたが、間に合はない。血汐はたら／＼と唇を傳つて、白布を捲つた括り枕を時ならぬ紅葉に染めなす。

「あれ、奥様如何遊ばしま……………」と、小壽美は、抱き起すやうに夫人の小胸へ手を掛けやうと爲た。

夫人は、意地わるくもその手を突き拂つて、取殺すやうな眼元に確と小壽美を睨む

だ。血に染みたる唇は、繪巻物で見る鬼女の假面その儘。

小壽美は、島田の根が緩むで覆へるばかりに顛へた。そして、一縮みに縮み上つた。然しながら、驟つて考へれば、奥様が自分を斯程までにお怨み遊ばすが、必ずしも意味なき邪推のみではないと思つた。只今日までは、自分以上に御前様の寵愛を受けて居る篠江がある爲めに、比較的自分に對する怨みの度が輕かつたのと、平生お嗜みの深い辛抱強いお氣質として、何も彼も腹底に疊むで、慎みに憤み、我慢に我慢を遊ばしてお在の結果が、日に増し病苦の募りゆくに連れ、寧ろ烈しき反動となつて、堪へ性もなく茲に勃發したものであると思つた。小壽美は、怨恨に燃ゆる奥様の顔容の恐ろしさよりも、其身の罪が更に百倍の恐ろしさである事を覺つた。

「何うして私は、御前様のお伽など勤むる氣になつたらう……………」
今更駒馬も及ばぬ後悔ではあるが、染々と自分の身の腑甲斐なさを感じた。同時に又、至らぬながらも、病夫人の爲めに自分の手足で出来る丈の看護を盡すのは、奥

様から此怨みを受くるに至つた自分の身の切ても罪滅しであると思つた。奥様は、假ひ何れ程の御無理を被仰つても、能ふ丈柔順に、能ふ丈親切に、そして、有る丈の赤心を舉げて、奥様の御臨終まで附添つて居るのが、御奉公の身の義務であること信じた。

(三十九)

亢奮の極に達して、半ば狂氣の如き夫人は、血を吐いてから一層心氣の逆潮を昂めた。小壽美が側らから何と言つて、慰めの語をかけても、全然耳にすら入れない。眼を瞋らし、黒髪を振りつゝ、物にでも掃付けられるやうな聲を絞つて、雛子の名を叫びつゝつけた。恐くは、まだ雛子の泣き聲が、何處からか夫人の耳丈に聞えて居るのであらう。

斯くまでに端たない行爲を遊ばす奥様ではないのに……と、小壽美は、ほどく

手の付けやうも無かつた。後に退つて黙つて傍観するより外ない。

約そ小半胸ばかりも、此淺猿しき状態が持ちつゝけられた後、夫人は烈しき眩暈でも感じたかのやうに、突然手を舉げて、自分の額を抑へ付けたが、その儘引込まれるやうに病軀を屈めて、血みどろの枕に突俯して了つた。

小壽美は、何事か知ら……と、驚きの眼を睜つて、少時熟と夫人の横顔を見入つた。と、瞬き一つ爲る間に、夫人の顔色は青き繪の具でも降りかけたやうに、非常なる速度を以て蒼白に變つた。

「萬一や、此儘にお成り遊ばすやうな事でも……。」

我知らず耳元へ口を寄せて、奥様一ツと叫むだ。其聲が通つたのかして、夫人は幽かに小首を動かしたが、疲れに疲れはてた氣色で、

「小壽美……白湯を一杯飲ましてください。」

思つたよりも落着いて、而も柔和であつた。小壽美は、呻と安堵の息を吐いて、白

湯の温いのを茶碗に注いで、怖々ながら枕頭へ持て行くと、夫人は待ちかねたやうに顔を擡げて、暫時思案の體であつたが、

「小壽美……和女は何を泣いて居るんです。」と、不審の面色。

「小壽美……和女は何を泣いて居るんです。」と、不審の面色。諸は、今までの一切を忘れてお在遊ばすのであらうか？それにしては、餘りに夢のやうな話である、小壽美は思つた。

「奥様、泣きは致しません。只今一寸お白湯を注ぎます時に、咳が出ましたので……それは然うと奥様、お枕をお取換へ致しませう。」

「あの……枕を取換へてお呉れか……。」

言ひながら、夫人は、初めて血汐に穢れたる枕に眼を付け、

「まあ……何時の間に這麼無作法な事を爲たんでせう。」

「只つた今方まで、大層お熱でお苦み遊ばしまして御座いますが、多分その時にでも……。」と、小壽美は、故意に左あらの風情で。

「まあ、わるい事を爲しました。濟まない。堪忍して下さい。」

「は、は、その御斟酌に及ぶ事では御座いません。」と、小壽美は、まめくしくも傍へ立寄つて、枕の白布を取換へなご爲るのであつたが、心では流石に、今方の状態を懐ひ起して、見ぬやうに夫人の顔を見入つた。仇の手で看護されつゝ、一刻毎に縮み行く命の果を待つてお在遊ばすかと思ふと、隠さうとするほど尙、涙は胸に突掛けて來るのであつた。

困憊と衰弱とに堪へがたくなつて、一杯の白湯に咽喉を濕はすと間もなく、喜久子夫人は、すやくと眠りに入つた。今見れば、鬼女の假面を欺くやうであつた彼の恐ろしの相格は、痕跡もなく消え失せて了つて、柔和な慎み深い——只病に衰へたるまでの其の顔！小膽なる小壽美は、それに付けても泣くより外はなかつた。

「小壽美さん……小壽美さん。」

がた／＼と、縁先の雨戸を揺り動かすらしい響きと共に、四邊を忍ぶ男の聲音が

灯

聞える。
小壽美の胸は、又しても激しく躍つた。

(四十)

まだ、深更と云ふでもないが、晝間さへ滅多に人の來た例のない淋しいお庭先から、突然自分の名を呼び掛けられた小壽美は、怎麼にもひよんな事はかり多い夜であると思つて、頓には其處を起ち上らうと爲る元氣もなかつた。

「小壽美さん、怪しい者ぢやない。忠七郎だよ。叔母様が御大病と聞いて、密にお見舞に來たんだから、面倒でも開けて呉れ給へ。」

「まッ、思ひがけない……………」
忠七郎と云ふ名を聞くより、小壽美は、その身の在所を忘るゝまでに喫驚して、轉げるやうに縁へ駆出た。雨戸の鍵を外して、一枚窓と繰り開けた途端、颯と吹き込

灯

忠七郎は、後を閉して、暫時縁端の所に蹲つて居ると、幽に喜久子夫人の躰聲が聞えた。

む間の夜風が、生憎と室内に只一個の臺洋燈の灯を奪つた。

内は闇！外は尙更海坊主の如き築山の黑影が、寂然として死の世界を見守つて居る。

「忠……………忠七郎様で御座いますか。」

「小壽美さん、他に誰れも居りはせんかえ。」

問ひ返す忠七郎の聲は、極めて低かつた。

「はい……………奥様の他には誰方も……………」

「そりや難有い。僕はもう藪蚊に責殺されさうになつたよ。」

忠七郎は、肩や袂の塵を拂つて、小壽美に手を把られながら内へ上つた。

「あの……………少々お待ち遊ばして下さい。只今洋燈が消えましたから……………」

「ぢや、早く點けて呉れ給へよ。」

忠七郎は、後を閉して、暫時縁端の所に蹲つて居ると、幽に喜久子夫人の躰聲が聞えた。

「小壽美さん、折角お寝みになつてお在なら、お目を覺さんやうにね。」
 小壽美もその心して、成たけ物音を爲せぬやうと、燐寸を摺るにさへ氣を置きながら、漸くにして洋燈を點した。

「さあ、何卒此方へ……………」

忠七郎は、音せぬやうに枕頭へ進むた。見ると、先達て別れた時の叔母上とは、雲泥月窟……………全然現世の人とは思はれぬ程の衰弱であつた。先づ肚胸を突いたのである。涙は潜々と下つた。思はず「叔母様ッ」と、叫びかけたが、はつと氣付いて口を抑へた。

夫人は、世界の中に唯一人の味方と思つて居る忠七郎の、態々人目を忍むで尋ねて来て呉れた事さへも知らずに、すや〜と夢路を辿つて居る。忠七郎の眼からは、それが却つて哀れ深く感じた。苟めにも子爵夫人ともあるべき人が、此重病に陥つて居るのに、素人の小壽美づれに任せきりで、看護婦一人雇つてないとは、何たる

残酷な仕打であらう。是では恐らく全快すべき病人であつても、全快すべき道があるまい。

忠七郎は、死人の如き病夫人の寝顔を覗いて、竟に一語もなしに後に退つた。不圖側らを顧ると、小壽美は、熟と兩手を疊に支へて、低く頭を俛れたぎりであるが、是も何うやら死人以上の顔色。薄暗い洋燈の灯影で氣を付けて見ると、血の氣淡き頬を傳つて膝に滾るゝ涙の光が、判然と讀まれた。

「小壽美さん、和女は能くも僕の語を用ひて、叔母様の看護を盡して呉れたね。僕は叔母様に代つて厚く禮を言ひます。」

小壽美は、何にも答へずに顛へた。萬感胸に迫つて、實は答ふるべき術を知らぬのであつた。

「此處で和女と話を爲さつても、若し叔母様の夢を驚かすと不可から、暫時次の間に控へると爲やう。そして、叔母様のお目覺に成つた上再び此處に来る事に爲や

うか。」

「はい……左様ならば何卒。」と、小善美は、僅に是丈を答へて、やをら次の室に起つて行つたが、其處には、小善美の寝るべき夜の具が、既に平生の通り敷かれてあつたので、彼女は急がしくそれを片付けに掛つた。と、恰度此の一刹那であつた。ついに無い事、母室の方から遽に人の覺音が聞えた。それが而も、子爵の殿の上履の覺音らしいのであつた。聞き馴れた小善美は勿論、忠七郎の顔色は土と變つた。暗中の迅雷！電の如く鋭き眼光は、がらりと開けられた障子の外の黒髯の中からばかりと閃く。

(四十一)

「やッ、手前は忠七郎ぢやの。」
子爵の聲は、破鐘の如く響いた。

逃ぐる間も、隠るゝ間も——坐り直すべき間さへもなかつた忠七郎は、頭を抱へて平蜘蛛の如くに疊へ平伏したが、此咄嗟の間に於てすら、彼は、彼の良心に省みて、毫頭疚しき所なきを自覺して居るので、恐怖の顔色は忽ち平生に復した。子爵は、例の爛々たる圓の眼を睜つて、隈なく室内の光景を見廻したが、不圖小善美が次の室の薄暗い所で、戦きの手を夜の具に投げかけた儘、息を殺して俯向いて居る姿に眼を付け、

「おッ、手前等は奥の病室で、密會を遂げをつたのぢやの。」
一捻りに捻り殺さんす勢ひを示して、子爵はつか／＼と小善美の側らに進むだ。その太き手は早くも、小善美の襟首に掛つた。

「小善美ッ、そ、そ、それへ出い。」

あはれ、荒鷲に掴まれたる小雀よりも腕き小善美は、子爵の手の動かさるゝ儘に、忠七郎の膝近くへ引出されたのである。

「態は何ちや。苟めにも明日をも知れぬ大病人の看護を預つごる分際で居りながら、此態はどツ、何うしたんちや。」

更に忠七郎を顧つて、その面に唾せぬばかりの罵聲も鋭く、

「忠七郎、貴様は何人の許可を得て、この幸野原の邸内へ足を踏み入れたのちや。貴様は何時の間に盗賊の修業を積むで、夜中他人の家へ忍び込む術を覺えたのちや。」

斯う言つた子爵の眉間には、山脈の如き青筋が凝つて、血走つた兩眼には、滿腔の怒氣が溢れた。髯と膝とは波打つやうに顫へた。双の拳は、今將に飛彈の如き迂鳴を以て、目に當る物を碎かでは已まむとやうに、硬く／＼膝の上に握り詰められたのであつた。

然しながら、忠七郎は恟乎とも爲ない。否寧ろ持前以上に落着き拂つて、

「叔父様、夜中お断りも致さず、叔母様の御病室へ立ち入りましたのは、重々私

の落度です。けれども、私は叔母様の御大病と承はつて、蔭ながらお見舞に参つたので、それ以外何等の疚い所は御座いません。密會だの盗賊だのとは、思ひも掛けんお語です。成程叔父様からは、絶縁のお断りを受けたに相違御座いませんが、私にはまだ孝一と云ふ男爵の兄も御座います。今は未亡人となつて居りましても貴船伯爵の夫人となつた骨肉の叔母も御座います。盗賊の不義漢のご仰せられましては、賤機一家の名譽にも關しますから、そのお語はお取消下さい。」

「な、何ぢやと、生嚙りの法律書生見たよに能くべら／＼饒舌をるが、第一不義漢でない證據が何處に在る？ 現在次の室には夜の具まで敷いてあるではないか。のみならずちや、此の女の髪を見い。只普通に膝と膝を對して、談話を爲て居つたものなら、島田鬚の根元まで此様に反り覆る理窟があるか。ばツ……………莫迦奴が……」

「あれ、御前様、髪の壞れましたのは、先刻奥様が太層お熱が昂り遊ばしました時

に……。』と、小毒美は、聞くに堪へかねて、辯解の語を挿むた。

『蒼蠅い。手前までが……。』と、子爵は、地雷火の様な聲を發つて、大喝一聲。無残や、喜久子夫人は、その聲に驚かされて、ざくりと昏睡の夢から覺めた。

(四十二)

「忠七郎、貴様は盗人……不義漢と言はるゝのが、口惜いのか。はッ、は、は、は、白痴奴！溝泥に生れた子子でさへ、溝泥の臭きを知つて蚊にならう蚊にならうと、腐心して居るのに、貴様は好んで溝泥の底へ潜り込もうと爲る目なし蚯蚓ぢや。子子にも劣つた目なし蚯蚓ぢや。然し……。』と、子爵は、一寸怒りの聲を鎮めて、

「蚯蚓や子子はまだしも、人間に害を與へる事はせんが、貴様は有害無益の毒虫ぢや。苟にも、義理の叔母たる人が、命旦夕の場合に、その枕頭をも憚らず、不義

の密會を遂ぐるとは何たる事ぢや。』

更に小毒美の方へ瞳を轉じて、

「貴様も然うぢや。虫も殺さん顔を爲とつて、能うも乃公が面に泥を塗りをつたの。

左程までに毒虫の忠七郎が好いとするなら、今限り貴様には暇を遣はす。とッと、

出て失せい。こりや、忠七郎、貴様は疾に絶縁した人間であるぞッ。寸の間たり

とも此處に置く事はならんから、此女を伴れて、早う出て行け。』

「仰せまでも御座いません、私は勿論、叔母様のお寝顔なりとも、お目に蒐りまし

た以上は、お見舞の目的は達しとるので御座いますから、直にお暇を致しますが、

小毒美さんを伴れて行くべき筈は、斷じて御座いません。過言では御座いますが、

小毒美さんは一體、叔父様の……。』と、忠七郎は、思ひ切つて此處まで言ひか

けたが、流石に叔父を面責するに忍びなかつたので、控へた。

「斷じてない……？ 貴様何の舌の根で左様な事を暗くか。不義の證據は歴然とし

て、此通り存しとるんぢや。起て！起たんけりや、手を持って、乃公が叩き出すぞッ。」

子爵の見脈は、愈激烈を加へた。腕を捲つて、將に突ッ起ち上らうと爲た。

「あれッ、御前様……………」と、小善美は、おづくながら袂に縋つて、

「私風情の數ならぬ者は、假ひ何のやうなお疑ひを受けましても、宜う御座います。が、私ゆゑに何にも御存じのない忠七郎様に不義漢の盗人のと、散々の汚名をお被せ申しましては、私が斯うして居られません。長いお目で御覽遊ばしますれば、必ず判然致すことで御座います。もしッ、御前様……………」そのお疑ひ丈は、何卒……

……情願、忠七郎様のお爲めにお晴らし遊ばして下さい。」

「蒼蠅と言ふに……………」不汲の井が落葉で埋れる時があつたら、晴らして遣らう。

元來、先達て忠七郎の奴を放逐する時、救ひ情をかけて、手前丈を救し置いたのが、乃公の失策ぢや。最早手前等の辯解など聞く耳は有たん。恐圖々々せんこ出

て失せい。」

忠七郎は、抗辯無益と悟つた。決然として座を起ちつ、

「小善美さん、致し方ない。叔父様が斯う思ひ込むでお了ひの上は、何事も自然の

裁判に任せるとして、我々二人で出て行くご爲ませう。」

「無論のことぢや。」と、子爵は、叩き付けたやうに言ひ放つて、同時に喜久子夫人の病褥を願ひ、

「奥、和女は眼を覺しとるのか。」

夫人は、十數分前から既に夢を破られ、おぼろげながら此場の状態を耳に入れつ、あつたが、何分にも病苦の疲れに堪へがたいので、出来る丈息を潜めて、穩便なる終局を心に願つて居たのである。

「はい……………」只今御前様の荒らかなお聲に驚かされて……………」

「左様か、それは氣の毒ぢやつたの。乃公は和女の病氣を見舞旁、今晚は是非共和

女に病院に行く事を納得さうと思つての……大奮發で遣つて来て見ると此始末ちや。和女の第一に信用しとつた小壽美が既に是ぢやから、到底明日からは自宅治療など思ひも寄らん事ぢやに依ての、辛うもあらうが、斷然病院に入るが宜しい。承知か。」

夫人は、黙つて眼を瞬いた。

(四十三)

起ちかゝつた忠七郎は、初めて喜久子夫人の睡りから覺めたる顔を眺めた。

「叔母様、僕で御座います。少しは御氣分が宜う御座いますか。」

「忠様……能く来て下さいましたね。」と、夫人は、懐しさうに顔を擡げて、

「……御覽の通りの容態です。今度はもう……もう到底助かりさうにありません。」

「叔母様、其麼氣の弱い事被仰つちや不可んですよ。」と、勵ます忠七郎の方が、寧ろ涙が先立つ。

子爵は、小面倒さうに眼を剝いて、双方を睨め飛ばした。

「奥、此様な恩知らず奴等に語を交す必要はないぢや。和女は寝どつて何にも知らんからこそ、その様な佛じみた事言ふとるんぢやが、現在和女の枕頭に於いて、不義の構曳を重ねとるほどの大膽とも不敵とも譬へやうなき人畜生奴等ぢや。證據は乃公が此黒い眼でちやんと認めとるのぢや。さッ、二人ともに早く出て失せんか。」

忠七郎と小壽美とは、顔見合して啞然たる外ない。

夫人は、顔を擡めて、自由ならぬ五體を無理に動かさし、

「……それでは御前様、小壽美にも只今限りで、お暇をお遣はしになるんで御座いますか。」

「不義の對手ぢや。憎くい……憎くい女郎ぢや。」

夫人は、返す語を失つて、その儘顔を掩つて了つた。今夜からは、何人の手に掛つて、看護を受くるであらうと思へば、愈此世の中に生甲斐のない身上と成り果てたのである。

忠七郎は、他所ながら其心根を察した。

「叔母様何事も定まる運命です。くよくよなさらんで、病院の世話にお成りになつた方が、却つて身體のお爲めかも……。」

言ひさらぬ中に、子爵は、又しても獅子吼の一喝。

「喧しいッ。貴様如きが兎や角言ふに及ばんこつちや。小壽美、手前も其處に何をめそ〜泣き萎たれとるんぢや。好いた男と一緒に出て行くのが、何で悲しい。大白痴奴。」

全然ハッ當りの爲體だ。忠七郎は、最早是まで也と袂を拂つて、腹では、勿論今生

の別れと知りつゝ、

「叔母様、呉れくもお大切に遊ばして下さい。」

更に叔父子爵の顔を視上げて、

「叔父様、お暇を致します。お語に従つて、此婦人は私が引連れて参りますが、他日若し私と此婦人との間に、何等の怪しき關係もなかつた事を證據立て得らるゝ時節が御座いましたら、その時改めてお禮に罷り出ますから、豫め御承知下さい。」

「あッ、は、は、は、猛々しくも吐しをるのッ。ちと舊式の言分ぢやがの、萬々一にも其度時節があつたら、乃公が此髯首を貴様に遣はさう。」

「宜しう御座います。叔母様が生きた證人で御座いますよ。小壽美さん、和女も僕の爲めに、飛んだ濡れ衣を被せられて氣の毒千萬であるが、一先づ一緒に此屋敷丈は出て呉れ給へ。」

忠七郎は、泣き居る小壽美に配目を呉れて、奮然として座を起ち上つた。小壽美は、素より無我夢中であつた。自分ながら自分の身の一寸先を知らない。只一命に代へても、奥様の御臨終までは……と、堅く心に誓つて居た本意に反いて、見す／＼此御大病の奥様を見捨て行くのは、正しく、死に瀕したる生みの母親を、人里遠き山奥に振棄て、行くのと同様の悲哀を覺えた。悲哀もその極に達すれば、涙さへ出ぬものである。小壽美は、現に魂を抜き去られた人形の如く、總ての意識、總ての感覺を離れて、只機械仕掛のそののやうに、とぼ／＼として忠七郎の後についた。夫人は、糸のやうに瘦せ細つた頸を差延べて、二度ばかり小壽美の名を呼んだが、あはれ、小壽美の耳には入らなかつたらしい。

(四十四)

夫人は、怨恨と悲哀とに充みたる絶望の眼を睜つて、只何事をか言ひたさうに良人

の顔を凝視めた。その蒼白い唇は、風にゆる、造花の葩の如く顫へた。

「奥、氣遣ふ事はないぢや。精神を鎮めて息まつしやい。」

子爵は、事もなげに微笑みながら言つたが、その下から直ぐ、倦怠るさうな大欠伸を漏らした。

夫人は、無言。

室内は、陰凄の氣に充ち渡つた。例の臺洋燈の周邊には、幾つとなく蛾のやうな虫が飛び廻つて、今消ゆる命とも知らずに、先を競つて灯を奪らうと爲て居た。灯はちら／＼と動いた。時としてぱつと明るく、時としてぱつと暗き影を作つた。

「小壽美に代るべき看護人がなげにやなるまいの。」と、子爵は、獨語のやうに小首を捻つて、

「奥、誰が好からう。お杉は齡ばかり拾ふとつても、氣が利かんし。お喜和はまだ丸出しの田舎娘ぢやが……。」

夫人は、無言。

「誰か和女の氣に適ふた奴は居らんか。尤も病院へ行くまでの間ではあるがの……」

夫人は、無言。

「氣に適ふた奴がなげりや、仕方がないぢや。今夜丈の所は、古河の老爺でも附添はして置かうかの。」

無言。飽まで無言。夫人は、その瞳をすら動かさぬのであつた。

「和女、腹を立つとると見えるの。小壽美如きを和女は、それほどに信用して居つたのが可笑い。乃公でさへ既う彼奴には愛憎もこそも盡きはて、了ふた所ぢや。」

と、子爵は、稍壓迫けるやうな調子で、

「誰も彼も氣に喰はんと云ふなら、乃公が當分看護の役を務めて遣らうかの。」

「何う致しまして、勿體ない。」と、夫人は、初めて珍しくも口を開いて、

「お語に甘へますやうで御座いますが……それ程の思召しが御座いましたら、篠江を何卒お貸し遊ばして下さい。」

「何ぢや篠江をツ……」と、子爵は、不意撃を喰つた鳩のやうな眼付で、

「彼女や和女、知る通りの我儘女ぢやからの。それに大體、和女と性が合はんではないか。」

「でも、殿しい御前様のお仕付で御座いますもの、小壽美の代り位は勤まらぬ筈は御座いますまい。」

今度は子爵の方で口を緘むだ。そして、夫人の眼には止まらぬほどの苦笑を浮べた。夫人は、自分の言ひ過しを悔いたかのやうに、淋しい元氣ない會釋を返して、

「とは申しますもの、會晩一夜位の所は、誰も居りませんが差支へは御座いませんから、御懸念なく彼方へお越し遊ばして下さい。」

「いや、豈夫に然うもならんぢや。今誰かを寄越すから、暫時の間淋しうとも待つ

とるが宜しい。』

子爵は、何時まで経つても際涯あらじと思つたので、取極むるべき事もそこ〜にして、竟に此陰凄なる病室を見捨てた。時刻はもう十一時間近であつた。

それから、一時間ばかり過ぎたが、母宅からは誰一人来る者がなかつた。夫人は、眞個の一人ぼっちであつた。けれども、小壽美がまた次の室の邊に居るやうな心地がして、暖一ツ出さうになつても、つい小壽美の名を呼んで見たいやうな氣が爲た。

『小壽美はもう居ぬ筈であつた。』
斯う思ひ直して、胸を抑へながら沈み入つたが、やがて、五臓の底から絞り出すやうな太息。

『あゝ、子爵家の天下はいよ〜篠江一人の物になつて了つた。もう何と言つても追付く話ではあるまい。』

所謂取詰めた女の一念でもあらうか、剛までさへ扶けなしには行かれぬ重病の夫人

が、窓際の柱に兩手を縋つて、轟とばかり起ち上つた。吹けば消し飛びさうな細い果敢なき影は、生らの幽霊となつて、眼前の破れ壁に映つた。おごろの髪に糸のやうな細首、悄然とした我が立姿は、我ながら我が現在の疑はるゝまでに没益しく思つた。

夫人は、そろ〜と壁に縋つて歩み始めたのである。

(四十五)

夫人は、よろばひながら縁先へ出て來た。先刻忠七郎の忍び入つた雨戸の鍵が、その儘外されてあるのに氣付いて、細目に其處を開いた。夏ながら、丑滿に近き夜の風は、濕つて冷たい。

夫人は、戸の縁に病軀を凭せかけた儘、十數分間は只瘦せこけた肩で息を爲ながら、星影一ツ空に見えない眞暗闇の庭を見て居た。左なきだに生甲斐のない運命の果敢

なさを自覺して居た彼女は、只何と云ふ事なしに死んで見たいやうな気が、むら／＼と起つた。

「此淺猿い姿に成下つて、一番愛して呉れるべき筈の良人からは嫌はれ、生みの子供等の顔は見られず、切ても味の味方と思つた小壽美は居なくなるし、病苦は日増しに募る許りであるのに、今更一日二日の命を惜むで見た所で、それが何の娛みにならう。」

斯う思ひ詰ては、もう再び我が病褥に戻つて、骨と皮ばかりの五體を毛布の中に横へて見る氣などは、全然無くなつて了つた。出来得べくんば、今死ぬる以前に、一目たりとも彼の篠江に出遇つて、怨みの一語を言ひ残してやりたくも思ふが、生耻の上に死耻までも曝すやうな板目となつては、それも却て冥路の障りであらう。遮莫よ！死ぬると定めた我が命に、愛着も嫉妬も未練も愚痴もあつたものかは。

「眞實天道様が人の賊を照し給ふものなら、罪科もない二人の子供等が上にも、必ず

や行末までの憐れみを垂れて下さるに違ひあるまい。」

夫人は、屹と決心の臍を固めた。然しながら、病苦の手足は、思ふまゝの働きを許さぬ。座頭の杖を探るやうに爲ながら、漸うの思ひで、辛うじて縁端を匂ひ下りたが、素より履物とてもないのである。縦し、有つたにしてもが、それを穿き得べき力があらうか。幾びか石に躓き、幾びか草の根に裾を取られて、喘ぎつゝ、闇から闇の木下蔭を辿つた……と、云ふよりは、摺り進むのであつた。

不汲の井は、幸ひに蓋もなかつた。健全な時にすら、来た事もない築山裏の不汲の井！無氣味な怖らしい怪談的の傳説文を聞いて居た不汲の井！死の一念に急ツ立てられたればこそ、殆んど夢中で辿り着いたのであるが、昔古りし花崗石の井筒を探り當て、先づ……と思つた心の緩みか、夫人は、忽ちぐたぐたとなつて草中に倒れた。

「三郎………雛子も、柔順にして成人して下さいよ。お前達の阿母様は………今……

……今此處の不汲の井の深い……怨を抱いて、死んで了ふんですよッ。」
 降るやうに面に打付かる蚊の迂鳴りに我ど氣付いて、えいやつと井筒に縋りながら、よろほひ起つたが、是ぞ彼女が現世に残したる最終最後の怨の聲であつた。何處からかとも知らず、ゆら／＼と迷ひ來た螢火一點、宛然死出の道案内でもするかのやうに、その幽かなる蒼い光を、闇に曳きつゝ西へ流れた。彼女は今將に身を逆まににして、上部半身を井の中へ没し去らんとする處であつた。
 忽ちにして聞く怪しの水音！闇は暫時その水音に動いて、魔のやうな風がさら／＼と井の上の檜の木を渡つた。
 萬事休矣。

(四十六)

幸野原子爵は、毎朝寢床の中で眼を覺ましてから、三四種の新聞を見て了つて、そ

れからゆる／＼と起き上つて、後庭の青葉を眺めながら、二三十分間の深呼吸を試み、そして然る後、篠江に供せしめて、風呂場の側の洗面所へ出て御座るのが例であつた。

今朝も即ち、その慣例通りの順序で、寢室の硝子戸を一杯に開け放させ、朝の冷かな新しい空気を呼吸しながら、殆んど世事の何事をも忘れたかのやう。好い心地さうにして、梢の露を翻しつゝ、飛ぶ子雀の鳴く音などに耳を傾むけて御座ると、突如！廊下に面した襖の外から、ばたばたと無遠慮に打叩くやうな物音。

「篠江、何事ぢや。」

子爵は、驚いて篠江に質ねた。篠江は、より一層の驚きを以て、手に持て居た新聞を投げ出し、

「誰方です。御前様に御用ならば、もうお目覺になつてお在遊ばしますから、開けてお入りなさい。」

聲に應じて、襖は開いた。

「杉で御座います。ご、御前様………た、た、大變が………」と、故參女中のお杉は、無作法な寝衣姿の儘、眼を圓くして、轉げるやうに敷居へ平伏す。

「お、杉か。奥の容態が急に變りでも爲たんぢやらう。」

子爵は、心中早くも喜久子夫人の病勢が一變したものと悟つた。

「い、え………御前様、さ、さ、左様では御座いません。」

お杉は、甚だしく息を喘まして居た。血相は勿論著るしく變つて、恐怖の影が明々と見られた。

「では、何事ぢや。早く言へ。」

「お杉さん、狼狽へては不可ません。早く御用の次第を申上げたら好いでせう。」

篠江も側らから聲を屬まして言つた。けれど、お杉の唇は只徒らに戦くのみであつた。約そ五六分間も過ぎてから後、吃音の人が初めて或事を口へ出し得たやうに、

「御前様………お、お、奥様が幽霊になつてお了ひです。」

「は、は、は、何を言ひくさる。」と、子爵は、例の豪傑笑ひで、

「相貌が著るしく變つるので、手前は幽霊と見間違へたんぢやらう。詰らん事言はずと、手前は雛子のお守役さへ懸命に務めとつたら、濟むのぢや。」

「い、え、御前様、さ、さ、左様な間違ひでは御座いません。」と、お杉は、片方の手に自分の胸を撫で下げ、片方の手に頻りと奥庭の方を指さし、ながら、

「平生は眞實にお温順いお姫様が、今朝の一時頃から明方へかけて、それはそれは阿母様をお慕ひ遊ばすこと普通大抵な事では御座いません。私も餘りにお氣の毒で堪りませんから、わるいとは承知致しながら、一目なりとも阿母様のお顔を見せ、差上げやうと存じ、今方お姫様をお抱き申して、御病室の前まで伺つて見ますと、お障子が細目に開いて居ります。ハテひよんな事がと存じながら、窃とお攝の邊を覗いて見ますと、その途端で御座います。お床の間の壁の所に………茫平

として何だか斯う墨繪のやうな人の形が……。」と、語を途切らせて、ぶるぶる
ツと五體を顛はせ、

「……奥様があの幽霊に成つて泣き沈むだやうな容に、熟と蹲つてお在遊ばすんで御座います。お姫様がきやツと怯え遊ばして、私の乳房が千切れたかと思ふほど緊乎としがみ付き遊ばしたので、私も思はずきやツと聲を立てましたが、それでも若しや心の迷ひ……かど存じまして、再び睡を定めて、お床の間を見直しました時には、もう影も形も御座いません。お褥の上にもお次の室にも、奥様のお姿が見えませんが……只蒼白いやうな臺洋燈の灯影が風に動いて……御前様……篠江さん、杉が申す事が眞實か詐言か、まあ何卒御病室の前までお越し遊ばして御覽下さい。」

お杉は、お凸の額からひしやげた鼻の頭へかけて、膏汗をたら〜。話の筋が割合に順序立つて居るのが、不思議な位であつた。

(四十七)

「では、何ちやの。奥が病室内に見えんと言ふんちやの？」

子爵は、尙お杉の言ふ所を、七分通りまで疑つて居た。

「御意に御座います。御病室にも何處にもお見えになりません。」と、お杉は、判で捺したやうに答へた。

「篠江……。」と、子爵は、稍氣遣はしさうな視線を篠江に注いだ。

「本統ちやらうかの。」

「お杉さんが申す處が、萬更根なし語でもないやうで御座いますね。」

「いや、杉が嘘を言ふ了簡はなうても、物には迷ひと云ふ事があるぢやからの。ぢやが然し……。」と、子爵は、臉の塵を拂ふやうに指先で撫でつゝ、

「病院に行くのが厭さに……何ぞか爲は爲まいか。古河を呼んで、瀬踏に病室を

「検分さして見い。」

篠江は、子爵に代つて呼鈴を鳴らした。程過ぎて、古河家扶は、恐惶の體で出て来た。子爵は、お杉から受取つた口上の概略を語つて、即刻夫人の病室を検分するべく命じた。

古河家扶は、慌しくも急ぎ去つたが、より十數倍の慌しさを以て馳せ戻つた。萎びた老顔には、驚愕と失望と周章とを混き交せた上に、更に大きな悲愁の色さへ漲り動いた。

「御前、お見えになりません。奥様もお見えになりません。こ、こ、小壽美さんも……………」

古河老人は、前夜小壽美が忠七郎と一緒に追放せられた顛末を知らぬのであつた。

「いや、小壽美の居らんのは、不思議はないぢやが、奥の姿は實際に見えぬか？」
「實際お見えになりません。で、お庭先の雨戸が一枚開け放された儘になつて居り

ます。」

「なに、庭先の雨戸が……………」と、子爵は、我知らず腕を組直して、

「奥庭の方も検べて見たのか。」

「いや、其處まではまだ……………」

「氣の利かん男ぢや。乃公も行くから、其方も来て見い。」

子爵は、流石に打捨つて置き、れなくなつたのである。直に寢室を出で、裏座敷の方へ向ひかけたが、

「篠江、和女等は来るに及ばんが、あの八十吉に早く出て来るやうに命じて來い。」

篠江は、蛇の眼の一件を懐ひ起して、八十吉に今此事を傳令するのは、甚だ機會がわるいと思つた。けれど、傳令せぬ譯にはゆかない。委細承知の旨を答へて、起ち上つた。

子爵は、諸事を顧みるに違あらずして、先づ喜久子夫人の病室へ急いで見ると、何

様二人の報告に詐言のないことが分つた。真白い敷布に掩はれた病褥の上には、まだ臺洋燈の茫乎とした光が、浮び得ぬ魂魄のやうに彷徨つて居た。子爵の眼の色は、怪しくも濁つた。

「久之進、實際ぢやの。」

「はい……………」

古河家扶は、烈しき心臓の鼓動に得堪へがたき氣色で、半白の頭を刻むやうにぶるぶる。

「何様、此處の戸が開いどるの。」と、二尺ばかり開け放されてある戸の間から、子爵は、無氣味さうに髯面を突出して見ると驚いた。曉の露はまだ荒れ頼れた築山裏の樹下蔭に漂ひ、幾年となく日の影の届かぬ彼の陰凄な樅の木の下——不汲の井の湿々とした邊から、自分の今突立つて居る縁先三四間の所まで、一直線にすーつと夏草が左右に靡いて、それが露の重味ばかりでなく、悶えに悶えながら病苦の足

で踏み躪りつゝ行つたらしい痕跡が、見るやうに残つて居る。

「おッ、不汲の井！古河、奥は不汲の井へ投身しをつたらしいぞッ。」

「……………」

主従は、只顔を見合したぎり、息を吐くべき術もなかつた。

(四十八)

「まあ、お前さんは何處へ行つてたんです。此大騒動も何も知らないんでせう。」
茫乎と今、間の抜けたやうな顔をして、外から入つて来た八十吉の姿を見ると等しく、篠江は、噛み付くやうな聲で頭ごなしに浴せたのである。

「何處へも行きや爲ねえよ。けごもの、生きてる人間だから、些とは動かあな。」

と、八十吉は、鼻の先を引擦つて、煙草盆を煙管の鴈首で引寄せ、

「其處に俺の居場所を探したのか。」

「探したの探さないのちやありや爲ません。私はもう一時何うしやうかと思つて、本統に泣きたくなつて了つたわ。」

「一體大騒動ツて云ふなあ、何事でえ。」

「奥様が到頭……。」と、篠江は、襖りの半分を口で言はずに眼で語つた。

「えッ、奥様がごねた？道理こそ、凄いやつたと思つた。」

「始つたよ又、それがお前さん、只の死に方ちやないんです。」と、篠江は、流石に背後を見らるゝやうな薄気味のわるい聲音で、

「今朝の夜明方に不汲の井へ身を投げてお了ひになつたの。」

「なに、不汲の井へ身を投げてお了ひだつて……？其奴あいよ〜以て大變な事になつちやつた。」

「だもんだからお前さん、御前様を始め古河さんでも其他の人達でも、八十吉は何うした八十吉は何處に居るつて、それは〜大騒ぎなんちやありませんか。」

「俺が居たつて、死んだ奥様が蘇生る譯ちやあるめえ。」

「そりあ然うだけどもお前さん、裏駝師として召抱へられて居る人間であつて見りや、お邸内で持上つた事件には、真先に立つて働くのが當然のこつちやないか。」

「いや、お話の中途だがねお篠、その儀ならば眞平御免を蒙らう。不汲の井と來た日にや、俺の爲めにや大鬼門だからな。大概這塵事になるだらうと思つたから、俺あ實は昨夜吉原へ浸け込んで、久振りに奴の顔を見て來たんだ。眞個虫が知らしたんだね。」

「まあ呆れた。然うとも知らずに血眼でお屋敷中を探し廻つて居たんだもの。過ぎた事は仕方がないとして、早く御前様にお目に蒐つて、お用詞の一ツも述べて下さい。」

「不可ねえ、その儀もボチ〜だ。」

「真逆にお爲なさんな。それちや、お前さん、是から先何う爲る氣なんです。」

「晝間は仕方がねえから、篠江さんのお顔をお立て申して、此のお屋敷に居るのよ。」

「申戯ぢやないわ。夜は………」

「言はずと知れてらあな、吉原へ通勤するんだ。左もなくちや、到底………」

八十吉は、兩方の手で、眼球の形を拵へ、

「例の一件もんが忘れられねえ。和女の前だが、一命にや換へられめえちやねえか。」

「本統にお前さんは、手も付けられない意氣地なしたね。口先ばっかし達者だつて、何の役にも立ちや爲ない。」

「……その次には又前夜よりの讀み續きで、手切の相談なんだらう。」

「勝手にお爲なさい。私は何にしても今、其麼事言つてる場合ぢやないから、御前様の方へ行きます。」

「へむ、其方こそ御勝手に遊ばしやがれた。併し、殿様の前だけは、違かの腹痛で

寐て居りますとでも言つといて呉んねえ。」

「知るもんですか、其麼事。」

篠江は、ぶり／＼爲ながら奥の方へ起ち去つて了つた。

「畜生奴、奥様が歿られたので、喜んでやがる癖に………」

八十吉は、腹で思つた通りを口走つた。そして、長い旅路の疲れでも發したやうに、ごろりと疊へ身を横へたが、素より心の落着かう筈はないので、又忽ちに起き返つた。ともすれば、煙草を喫ふより外所在がないので、六疊の室内は、見る見る雲のやうに煙が籠つた。煙の奥に何物か光つた。八十吉は、身體ぐるみそれに引付けらるゝやうな氣が爲た。小窓の外で矢竹の葉ががさ／＼と搖いた。

(四十九)

八十吉は、篠江が立ち去つて、室内が淋しくなつて來ると同時に、再び又變な氣分